

主旨と概要

1 本書の主旨

本書は、経営哲学の観点から、責任を検討する。経営学では、社会的責任というテーマで議論されることが多い。経営倫理の観点から責任が検討されることもある。しかし、本書では、経営哲学の観点から、責任を検討する。

「経営哲学」は、哲学が本来の基礎である。「経営哲学」は、社会哲学、政治哲学、法哲学のように、哲学の一分野である。それゆえ、哲学がおおよそいかなるものであるのかということが明らかにされ、それと経営学の研究成果とが総合され、これを基礎にして、本書の課題である「責任」を検討しなければならない。そのため、はじめに哲学の諸部門と基礎概念を明らかにし、ついで哲学の課題領域をあげる。なぜこのように哲学にまで遡らなければならないのかということは、哲学はその根本の存在にまで遡り、自ら考えるということをや、要請しているからである。この思考こそが、哲学それ自体の存在理由であると言われているのである。また「経営哲学」は、その存在基盤の哲学にまで遡るので、社会哲学や政治哲学、法哲学などと通底することができるだけでなく、こうした哲学の諸領域の境界を超えてまでその視野を広げ、もつことが要請されるのである。「経営哲学」という領域なので、「経営哲学」という専門領域に限定して議論して、限定された分野だけの結論を得ることは、本来の意味において経営哲学的考察、ましてや哲学的考察ではない。現代の社会諸科学で基本的要件である「分析」のための「機能分化」……例えば「経済学的分析」「政治学的分析」、さらには経済学の分野の「組織分析」などのように……が要請する分析視座の厳しい限定からは、おおよそ「非科学的」で「分析的ではない」、さらには近代科学の理論を背景にした正確性・実証性を欠くだけでなく、その事態の「単なる記述」あるいは「評論」に過ぎないのであり、「成果」にさえならないとして拒否されるべき思考・結果だと言える。ここに経営哲学の意義があると同時に、厳しい難しさが横たわっていると言える。「経

営哲学」は「哲学」の応用領域であるとして、「哲学」それ自体にまで遡らずに、経営哲学の課題・問題に取り組んでいる著書・論文が多い。しかし、経営哲学に取り組むには、哲学それ自体にまで目を向けなければならないのである。

哲学の諸部門と基礎概念を概要し、課題領域を明らかにして、その後、本書の課題である責任を検討する上で必要な、経営学の生産過程に対する現代の基本的概念を概略し、経営学の「事業」という生産過程にかかわる基礎的な活動の基層にまで踏み込んでみる。責任を検討するには、事業の基層にまで遡ることが求められるからである。そして、経営学で現代では社会的責任を議論する上で通常用いられている「ステークホルダー」という概念の淵源を探ってみる。

このような基礎的工事を行った後に、本書で扱う責任の検討へとすすむ。その際、責任の検討を行う上で、2011年3月11日の「東日本大震災」を契機にして起きた「東京電力福島第一原子力発電所」に起きた事故を取り上げて、責任を検討する。本書は、おおよそこのような概要に基づき、展開される。

この概要では不明な点も多いので、もう少し具体的に述べてみる。哲学の諸部門では、哲学は、「価値論」と「知識論」という大きく2つの部門がある。「価値論」には美学・宗教神学・倫理学の学問領域がある。「知識論」には認識論・方法論・論理学という学問領域があることは周知である。経営哲学と呼ばれる経営学の領域では、倫理学と認識論・方法論に着目され、議論することが多い。価値論からは経営倫理や理念という概念を基礎にして議論することが多い。「経営哲学」の通説に従わずに、哲学の諸部門をあげて責任を議論しようとしたのは、「価値論」「知識論」の双方にかかわる「存在論」という広大な領域の存在を示したかったからである。したがって、哲学の諸部門は、存在論・価値論・知識論の3部門として、本書では理解してすすめる。

価値論では、人間の行為・行動にかかわる諸学問がある。知識論では、人間の行為・行動の、より科学的な認識・理論構築へと議論が展開されている。経営という概念は、人間や組織の行為・行動、すなわち目的的行为・行動だけではない。行為・行動の結果までが本来包摂されていなければならない。現代

の経営学は、その認識の科学性・実証性のため、経営行動の一時点が切り取られ、その時点での行動が科学的に理論化されている。行動結果に関しては「社会的責任」という領域で扱われている。経営概念は、目的・意図と行動とその結果までの一定の「時間経過・過程」が要請され、包摂されているのである。また、人間や組織の行動は、経済目的だけからなされるのではない。社会文化的な観点が行動に強く影響している。目的的行动は、技術を伴って行われている。現代では、技術が生態学・エコロジー的観点から、技術選択や技術を使つての行動結果に対して、厳しい制約が課されていることも周知である。目的的行动は、政治法的過程から強く影響されていて、政治法的システムを無視して、経営行動を検討することはできない。経営行動は、経済システム・技術エコシステム・社会文化システム・政治法システムのなかで、計画され実行され、さらにその行動から生み出される結果……全体として取り巻く社会に対する結果・その意義と評価……までが一貫しているのである。この限りで経営行動は、経営行動過程として扱われるべきである。また経営行動の全体的理解には、経済・技術エコ・社会文化・政治法のそれぞれのシステムを合わせてみなければ、本来の「経営行動」にはならない。経営システムは、この4つのシステムの多重性・重層性を持ち合わせており、この4つのシステムから、当該主体の観点からのその目的の決定から結果と評価、当該主体のなした行動の帰結の社会的意義と社会的評価に至るまでの全過程が扱われ、またその行動結果のもつ意義もそれぞれの観点からあわせて検討されなければならないのである。「目的」に限定した議論、理論化は可能である。「行動結果」に視野を限定して、より正確に厳密に分析することは必要である。この点に関する異論はいっさいない。しかし、現代の科学論では、このようなそれぞれのシステムを同時に合わせて考えることはできない。近代科学が「視野を限定した分析」を要請し、分析の厳密性・科学性・実証性、そして理論化が、近代科学のメルクマールとして、理解されているからである。

現代の社会において責任を検討する上では、近代科学の要請に沿って、分析すればするほど、むしろその責任は、それぞれの領域・学問にわたり、結局は「これ以上は、別の学問領域の研究成果を俟たなければならない」と述べられ、「科学」としての精密性・分析性から、そこまでのところで「研究」が

打ち切られ、成果がまとめられてしまう。研究上、より全体的・総合的に取り組む必要性が強く指摘されている。「境界領域的研究」必要性が指摘されている。現代社会においては誰もが、総合的・全体的研究の重要性を疑っていない。しかし、そのための「科学的な方法」「理論的な構築」が求められ、その方向が示唆されていても、踏み出していない。探究されていても、確固たる成果はいまのところ全くない。わずかに、その方向だけが模索されているに過ぎない。本書で取り上げる責任、取り分け、本書で取りあげた「東京電力福島第一原子力発電所の事故」、通常は「東電福島第一原発事故」さらには「福島原発事故」と略称されている、アメリカのスリーマイル島の原発事故・ソ連のチェリノブイリの原発事故に次ぐ、第3次の大きな原発事故に対する責任を研究する上では、ここに示した4つのシステムから全体的に検討しなければならないと思われる。このような方向へと一歩でも踏み出すには、根拠がなければならない。「近代科学の分析性からもたらされる厳密性・実証性、そこからもたらされる理論構築」からはどうも受け入れられず、むしろ「分析以前」として却下されることは十分承知している。そのためには、「近代科学の分析性」とは異なる根拠として、哲学の「存在論」の大きな領域を上げることができるのである。このためにも、哲学の諸部門は必要不可欠なのである。

このような観点に立つと、現代物理学でさえ、次のような議論がなされていることに瞠目（どうもく）する。たとえば、デスパーニアは『現代物理学にとって実在とは何か』の中で、存在という概念は有用であるだけでなく、必要不可欠だと指摘している。ほとんどすべての体系的な実証主義においては、一般的なものの存在が否定されるが、構造化された独立の実在という考え方を述べ、「覆い隠された実在」を指摘している。厳密性・実証性を旨としている現代物理学でさえ、覆い隠された実在に関して科学的な意味での証明を求めるべきでない。この立場は「ありそうもないことに基づく曖昧な論述・plausibility arguments」によってしか主張できないが、ある程度の寛容性を持つべきだ」とさえ指摘しているのである。デスパーニアの議論から、「覆い隠された実在・存在」に向けてこれまで科学的探究が展開されていることが理解できる。このような説明でも「科学的でない」と拒否する「近代科学の信奉者たち」には、J. P. デュピュイ『秩序と無秩序』での議論を示しておく。「機械」における全

体と部分の考え方を「生物あるいは生きた体系・生命体」にそのまま当てはめることはできないと考えられる。ここから明らかになるのは、物理－機械体系を基礎にした思考体系と生物－化学体系を基礎にした思考体系との基本的な差異である。イリア・プリゴジンらが『混沌からの秩序』『複雑性の探求』などから19世紀の科学に矛盾する2つの考え方が芽生えたと説明している。1つはニュートンに代表される古典力学、物理学の世界である。その後を継いだ量子力学やアインシュタインの理論までは、安定した平衡を保つ系における可逆的な決定論的な理論構造であった。それに対して熱力学が理論化されてきた。これは一方向の不可逆的な法則であり、非平衡状態になると「ゆらぎ」が生じる。それが増大するとカオス・混沌などの非平衡状態があらわれる。そこから新たに形成される自己組織化秩序と構想を「散逸構造」と名付けたのであった。ここで重要な点は、時間軸の導入と、運動の複雑な個々の動きを総体として扱うということであった。これは古典力学・物理学、さらには機械体系を範としたモデルや理論とはかなり基本的な性格を異にしているということを指摘しているのである。

このような議論から、複雑な実在への探究の必要性が明らかになる。もちろん、プリゴジンの求めているレベルとその正確性・厳密性が著しく異なっていることは承知しているが、隠された実在に向けての探究の必要性から、理論的ではないことは誰の目からも明らかであっても、その実在・存在を無視してはならないことだけは確かである。こうした複雑な存在・実在のための「科学的方法」「理論」が整うまで俟たなければならないのではない。科学はいかなる分野にあっても、その原初期には、いっそう冒険していたのであった。これを次第に理論化し、厳密性と実証性を高めてきたという、その歴史過程を理解すべきである。近代科学の基礎であり、金字塔と評されるニュートンの万有引力の法則は、ニュートンがすべて「実証精神」だけで、この成果を導き出したのではない。E. A. バートは『近代科学の形而上学的基礎』の中で、ニュートンにとって絶対的空間は神が遍在しているだけでなく、神の知識と支配が活動する無限の舞台として考えていたのであった。ニュートンは神が積極的に世界をコントロールすると主張していたと結論付けているのである。

このような議論から、「存在」の「探究」への冒険の必要性を明らかにし

た。科学的思考の意義は、厳密性・精確性・実証性にあることは確かである。あわせて、未知なるものの探究にこそ、その最大の意義があることを明らかにしたかったのである。哲学の存在論を基礎にすることにより、現代では複雑な実在・存在への探究の必要性が意識されていても、その方法論的制約から踏み出しえない複雑な実在への探究へ進むことができるのである。ここにこそ、「システミックリスク」「構造災」の解明に取り組むための「科学的根拠」「方法的根拠」が存在しているのである。哲学にあつては、価値論・知識論の領域からそれぞれ研究がすすめられているが、この双方の領域は、これを基礎にした「存在」を巡っての議論なのである。哲学の諸部門では、本研究の方法的根拠が明らかにされる。

哲学の課題領域では、アリストテレスにまで遡り、『ニコマコス倫理学』『政治学』それ自体だけでなく、現代のアリストテレス研究の最高峰の研究成果も参照しつつ、実践における善と正義を概略する。責任の観点から、合法性だけでなく、社会的公正がその基礎にあることを明らかにした。社会的公正のバランスが欠ける時には、社会的公正をただすべく、是正的あるいは匡正（きょうせい）的正義が求められることを明らかにし、ここに責任が求められる基礎があるとしたのである。配分的正義・交換的正義も、社会的観点から強く求められることも確かである。いったい何をもって社会的バランスを保つのかということとは極めて難しいが、是正的あるいは匡正的正義も、その社会的バランスをもとめるのである。

現代社会において、生産活動に伴う責任を検討するために、人々が古代・中世・近代・現代を通じて、技術や資源エネルギーを含めた人々の全生活体系のあり方、これを通常は「文明」というが、「文明」という観点から検討されなければならない。哲学が、おおよそ人間・社会の存在を巡って、その根本に遡り、原則を求めるという思考が基礎であれば、人間・社会が生きてゆくには、物質・資源・エネルギー・技術をもふくむ全生活体系＝文明を扱わなければならない。人間の資源エネルギー・技術を含めた全生活体系は、生産活動といわれる。近代社会になれば、この技術体系が古代・中世とは異なっている。生産活動は市場を前提としていない。「市場」が生産活動の前提に存在するようになったのは、近代になってからである。また市場が社会的に強く影響した

のは、歴史上、まさに最近のこととすることができる。「市場」の存在とは別に、「文明」すなわち資源エネルギー・技術をふくむ人間・社会の全生活体系が検討されなければならない。この中から技術選択がなされ、促進されてきたからである。資源・エネルギーの制約が感ぜられず、むしろ選択された技術の方が資源・エネルギーを制約することが、現代社会に至るまでの基本的な動向であった。「優れた技術」とは、「資源・エネルギー」をより豊富につくりだすもの、節約するものとして理解され、評価されてきたのであった。

人間の資源エネルギー・技術を含めた全生活体系は、生産活動といわれるが、生産活動が社会的に継続されると、「事業経営」として概念化される。近代社会になり事業経営は、収益活動と強く理解されるようになってきたが、「事業経営」それ自体は、確かに「経済過程」を伴うが、経済過程それ自体は、収益活動ではない。現代ではNPOが事業として経営されている。事業経営は、人々の全生活体系に必要なモノを生産する過程である。それゆえ、その生産物や生産過程で生命の尊厳を傷つけ、生命に危機を与え、死に至らしめてはならないという原理が要請される。これを経営哲学の生産の原理と名付けることができる。科学・技術の進展の速度が速まれば、経営哲学の生産の原理が、いっそう強く求められる。現代の生産の基本的要件として、生産の計画設計の段階から、製造・流通・使用・回収（廃棄）の全過程で、省資源・再使用・リサイクル、さらにリースまでを組み込むことが基本原則として確立している。そのため、現代の経営哲学は、生産の基本的要件を充足した生産原理が、社会の中で強く要請されるのである。

事業経営が次第に社会的に広がると、事業経営を巡ってその社会の人びととの関係が広がり継続する。「事業経営」として、継続的な社会活動であれば、事業経営がなされる社会の中で、合法性が遵守されることが要請されると同時に、社会的公平性も要請される。この側面を経営哲学の社会性の原理と呼ぶことができる。経営哲学の社会性の原理は、社会関係が長期にわたり、広がり、複雑化すると、とりわけ社会的公平性の維持は難しい。たとえ「合法的」であっても、社会的公平性が著しく欠如すれば、そのバランスを求めるさまざまな社会運動が生起する。長期的には、経営哲学の社会性の原理は、無視することはできない。

経営哲学には、生産原理と社会性の原理の2つの原理が存在している。このような経営哲学の観点から、本書では、責任が検討されるのである。

次に、経営学の領域から、現代の責任を検討する上で不可欠いくつかの基礎的概念を述べる。はじめに、経営システムが、経済・社会文化・技術エコ・政治法のそれぞれのシステムの多重的・重層的システムであることを基礎原理として述べる。「経営システム」は、社会的存在として、こうした多重的・重層的システムとして「存在」しているのである。「社会的存在」とは、本来こうした性格を持つのである。哲学の存在論を基礎にして、これを巡って責任を検討するのである。経営活動は、技術・資源エネルギーを伴う生産活動である。生産活動の側面は、経営学の領域では「事業」という概念で示される。

現代経営学の研究対象は、「企業体」だけに限定されていない。大学、病院その他の非営利組織も重要な研究対象となっている。非営利組織・NPOであっても、その活動には「経済的側面」が伴っている。経済学的思考が強ければ、経済過程こそが、経営学の中核であるという主張・認識が強く、この側面を除くべきでない、さらにはこの側面を除いた経営学はないとする議論は多い。しかし、「出資」に対する「報酬・収益」と限定して理解されるべきでない。「企業」「非営利組織」だけでなく、政府・自治体などの「公的機関」であっても、「収支バランス」は不可欠である。この原則は無視できない。ただし、経営学が研究対象とする組織、機関によって、その「経済過程」のあり方やその意義は異なっていることだけを指摘しておけば十分である。

現代では、世界全体を見れば、今なお個人事業主、すなわち個人あるいはその家族だけで、財・サービスを生産し、これを自らが消費している人たちも多い。しかし他人と交換・売買している人々も多い。「農業」では、このような形態は多い。しかしそれ以外の財・サービスの生産活動では、次第に複数の人びとが集まり、集団、組織を構成し、これによって活動していることが多い。現代経営学は、次第に組織をその研究対象に焦点を合わせてきている。さまざまな生産活動が現代では集団や組織によっているので、この側面も無視すべきではないことは、敢えてここで指摘するまでもない。

広く、現代社会で生産活動を研究対象として経営学を考える時、個人であろうと、集団・団体・組織であろうと、あるいはそれが従事する技術・資源・エ

エネルギーを伴う生産活動の側面、すなわち、伝統的な農林漁業、鉱山、あるいは中世にも見られた鍛冶屋や道具、簡単な機械などの生産者であろうと、産業革命以降の工場や工業製品の製造、あるいは現代では、「輸送」というサービス生産、「電力」という照明・動力の基礎になるようなエネルギーの「生産活動」、さらにまた、IT という目には見えないような「ネットワーク」という「無形財」の「生産」を主たる業務にしている「生産活動」であっても、またヒトが自らの身体を駆動させてモノを動かしたり、あるいは「マッサージ」のように自らの身体で、相手の身体の苦痛や疲労を緩和するケアなどまで、きわめてさまざまな形態があっても、これらはすべて経営学では「事業」という概念で研究されている。ただし、それぞれの事業で用いるべき技術・資源・エネルギーは千差万別であることはいうまでもない。

現代ではおおよそ考えきれないほどの多種多様な生産活動・事業活動がなされている。経営学で「事業」活動という側面は、近代社会になり、経済学・社会学でも、その重要性から研究されている。経営学の事業の側面は、経済学・社会学では「分業」として取り上げられている。近代社会で事業が「分業」として取り上げられ、研究されるのは、近代社会が「分業社会」になっているからである。「責任」を検討する上で、経営学の事業の側面を「分業」という観点から、その基礎を探り、「事業」「分業」が主に「効率性」の観点から検討されることが圧倒的に多く、分業は社会的効率の基礎だとされる。しかし「分業の基層」まで遡ってみると、「分業社会」では、相手の、あるいは現代では全く匿名の人びとの「生産した財・サービス」をいちいち精査して交換・売買せず、そのままそれを使う・消費することから、生産の側面では確かに「効率」は大切であるが、人々の社会生活が安定して営まれるには、「効率」以上に、生産された財・サービスに対する「信頼」が不可欠なことを明らかにする。「分業」社会で、供給される財・サービスに対する「信頼」が欠如すれば、たとえ供給される財・サービスが効率的に生産され、市場価格が下がったとしても、「分業社会」は、苦痛になる。これ自体は、当然であり、何ら意味をもたないように見えるが、社会的信頼が、その生産主体に対して消滅した場合には、その生産主体は、社会から排除されるということが明らかになる。社会的信頼が失せる時、「責任」が「問われる」のである。ここから「責任」が問題

になるのである。

これを受け経営学で 20 世紀以降、「社会的責任」というテーマで議論され、20 世紀後半から、経営学で「ステークホルダー」という概念が登場してきていることが検討される。21 世紀に入り、国際機関の ISO（国際標準化機構）では、ISO26000 が開発され、承認されている。この基準には、人権をはじめ、公正な事業慣行、さらには加担・不作為などの法的概念が取り入れられ、重視されている。これは経営学で議論されてきた社会的責任が、「ステークホルダー」という、その活動を巡って社会的に監視し続ける法的側面が裏打ちされていることを意味しているのである。ステークホルダー概念の淵源にまで遡る時、責任が法的にも裏打ちされなければならないことが明らかなる。ここに責任の検討は多重的・重層的になされなければならないことが判明する。

以上のような概念を準備し整理して、責任、ここではより具体的にするために 2011 年 3 月 11 日「東日本大震災」で発生した、世界で 3 番目のシビアアクシデント・過酷事故である「東京電力福島第一原子力発電所の事故」を取り上げ、「原子力発電」それ自体をも含めて、責任を検討する。現代の経営哲学の観点から、全ての財・サービスの生産が、企画設計から最終製品の流通・消費・廃棄に至るまで、そしてその生産過程の途中で生じる廃棄物まで、省資源・再使用・リサイクル、リースまで組み込み、同時に人々の生命を危険に晒したり、陥れたり、死に至らしめたりしてはならないという原理が、科学が進展していることから、いっそう強く要請されていることが明らかになる。その原理は「生命の尊厳・尊重」という極めて平凡で、まったく当然の「原理」「規準」に過ぎないが、現在、世界的に原子力発電が広がりつつあることを考えると、この原理・規準の有効性・重要性は明らかになる。

経営哲学の観点から、社会性の原理、すなわち合法性と社会的公平性の貫徹も要請される。経営哲学の社会性の原理は、現代社会では、これからいっそう強く求められる。

2 本書の概要

以上のような主旨の本書の概要は以下の通りである。

第1章 経営哲学の諸部門と基礎的課題では、経営哲学は哲学を基礎にしているのので、哲学にまで遡り、哲学それ自体の諸部門の全体像を示す。そこでは価値論・知識論と存在論の3つの部門に大別されることを前提として、この研究をすすめることを明らかにする。そして経営哲学の観点から、哲学の「存在論」の意義と役割が述べられ、現代の技術までももふくめた社会現象・事象が、全体的・重層的存在であることを示すことにより、経営システムという存在それ自体が、技術的エコ、経済、社会文化、政治法の各システムの多重的・重層的存在であることを理解する。哲学の存在論から、多重的存在としての経営システムを扱うための基礎を明らかにする。

哲学に隣接する諸概念を識別して、経営哲学の基礎的課題にすすむ。ここではアリストテレスの哲学に依拠しつつ、実践と善、正義＝正しさを述べ、経営活動が実践される最終的な目的が善にあり、それが、正しさ、すなわち合法性と社会的公平性により、担保されることの重要性を説く。

ついで経営システムは技術・エコシステムを、それ自体内包しているので、技術・物質・エネルギーまでももふくめた人々の全生活体系として、経営哲学として「文明」まで遡ることの意義を明らかにする。文明は、技術・物質・エネルギーをふくむ全生活体系であることから、人々の全生活体系に必要なモノの生産が、現代の経営学においては、企画設計から、最終製品の使用廃棄まで、その生産過程の途中で生じる廃棄物までが、人々の生命の尊厳・尊重に資するべきであって、生命を危険に晒したり、危機に陥れたり、死に至らしめてはならないという、「経営哲学の生産原理」が、生産活動に要請されることが述べられる。現代では、科学・技術の進展から、この原理が特に重視されるべきことも示唆される。生産や事業経営として現代では企業がその中心であるので、「経済制度」との関連が述べられ、経済制度は多様性を有していることも明らかにされる。経営活動と事業では、社会的に活動がなされる時には、その経営哲学として社会性の原理、すなわち合法性と公平性の原理が導かれ、事業経営の存続には、社会原理が無視されてはならないとされる。そして経営哲学の2つの原理として、生産の基本的要件を充足した生産原理と社会的原理が厳然と存在していることが、結論として導かれる。

第2章 経営哲学における分業の基層では、経営哲学の基礎になる「事業経営」が、経済学・社会学では一般に「分業」として概念化され、その概念から研究が進んでいる。社会学では社会的分業が議論され、そこでは多様性の意義が明らかにされる。経済学では分業は、生産性・効率の観点から議論され、これが人間の行動動機として自己利益の最大化が一般に理解されている。これは自己保存欲求と強く結びついて理解されている。第2章では、「震災時」に企業も人々も、「ボランティア」で「経済的利益」「自己利益」を離れて、活動したことを見る。ここで自己生命の維持・保存のまさにその危機を迎えている時に、社会的騒乱が巻き起こらず、安定していたことが注目されたが、これは社会に「自生的秩序」が存在していることが「論証」される。自生的秩序は、人々の慣習経験だけでなく、教育などまでふくめたさまざまな社会格差、所得の安定などから社会に生み出される「相互信頼」という、おおよそ効率・経済性、さらには自己利益とは別の秩序が控えていて、これが社会編成原理としての分業、事業経営の基層に存在していることが明らかにされる。分業、事業経営の基層に「相互信頼」が横たわっていることが明らかにされる。第2章は、分業、事業経営の基礎が、相互信頼にあり、これが維持されれば、事業経営が進展するが、これが阻害されると、社会の中で「責任」が問題になり、場合によっては、問われることがあるとされる。

第3章 経営学における責任の行方—経営学的観点の意義—では、経営学のなかでこれまでアメリカの経営学からスタートして「社会的責任」というタイトルで議論されている責任論を概略する。そして、アメリカの経営学には見られないような大変優れた日本の経営学の研究成果である「意図せざる結果」を議論した「行為論」、「随伴的結果」の「先行研究」を取り上げ、経営学においては「対応・応答」としての「責任」に研究の比重が大きく傾き、その限りでは、実証研究、そしてリスクの観点から望ましいが、行為の当事者への責任、「負荷・負担」としての責任の側面が著しく欠如してしまったことが明らかになる。「行為当事者」としての「負荷・負担」としての責任は、確かに「価値」をふくむので、「実証科学」としては展開されない方向へとすすむ。しか

し、行為当事者への責任は、経営哲学の2つの原理、すなわち生産原理と社会性の原理から、求めることができ、要請されるとされる。

第4章 社会的責任論の現状とステークホルダー概念の淵源についてという章では、社会的責任論の現状として、ISO26000の「社会的責任（SR）」が取り上げられ、概説される。ここから明らかになることは、経営学の社会的責任論が、現代では、企業体だけに限定されず、ひろく非営利組織NPOや団体にまでおよび、おおよそ事業経営を社会で継続する上で、社会的責任が、その活動自体に統合化されてなされるべきことが、国際機構で承認されていることが明らかになる。ここでは、法的概念も包摂されている。経営哲学の観点からすれば、その生産原理と社会性の原理の充足が要請されることが、ここでも十分に理解できることになる。

経営学で一般に「社会的責任」としてどのように議論がなされ、展開してきたのかがこの章で明らかにされる。ここで注目すべきは、21世紀になり、アメリカでも、日本でも企業観のパラダイム・シフトが起き、経済責任だけでなく社会価値の充足の要請が強化されていることが指摘されている点である。現代では企業活動は「純然たる経済単位」として見るべきでなく、技術エコ、政治法、社会文化、経済のそれぞれシステムの多重的・重層的な存在であることが、ここでも一般に理解されているという点が重要である。社会的責任論では「ステークホルダー」という用語が、現代では世界的に使われているが、「ステークホルダー」という概念の淵源を明らかにすることにより、社会的責任が、「法的政治的」システム、制度と密接に結び付き、場合によっては社会的責任に対して規律を与えることがあることも明らかにされる。同時に「インタレスト・グループ」概念の淵源も明らかにされ、この概念の基本的な差異とその社会的帰結が明らかになる。

第5章 経営哲学からの東電福島原発の事故責任では、現代までの福島原発事故に関する調査報告書の概要とその内容が比較され、その課題を示す。そして経営哲学の観点から原発事故の問題を検討する。原発が物質・資源・エネルギーという広く人々の全生活体系から推進されてきたことは確かであっ

た。『シビアアクシデント・過酷事故』を契機にして、生産物は「電気エネルギー」であり、それ自体は問題ないが、「事故を全く別」にしても、すなわち通常の稼働状態であっても、その生産過程からの「核汚染物質」「廃炉」という「設備廃棄」では、その最終処分さえ未定であり、廃炉……設備廃棄には長期にわたる細心の注意が不可欠であることが判明した。経営哲学の生産原理、「生産過程の途中で生じる廃棄物までが、すべて人々の生命を危険に晒してはならない」とする原理に著しく抵触していることが明らかになった。これに『シビアアクシデント』まで加えると、その技術体系は、経営哲学の生産原理からは受容できない技術体系であることが明らかになる。この点で「原発」が、「事故」とは別に、安全ではないことが判明する。

原発は「経済的だ」という議論がなされ、推進されたことも確かであった。経済制度の観点から原発を検討してみると、事故とは別に、その廃炉過程、そして核物質の汚染廃棄物の処理などの全過程をふくめると、その原価は経済的ではないことが明らかになった。原発の経済計算が、現代の生産原理でなく、生産物の直接にかかる費用が中心であり、原子炉・原子力発電所のもつ廃棄その他の過程で必然的に発生する費用が計上されていないことが明らかになった。さらに『原発事故』から付随する「除染費用」「賠償金」その他の多くの費用計算をすると……現在では、この費用が一体どの程度になるのかさえ不明である……決して「経済的エネルギー」ではないことも明らかになった。

経営学および経営哲学からの社会的責任では、経営学における責任……「企業責任」「経営責任」「管理責任」「監督責任」「株主への責任」や「組織の意思決定にかかわる人々の責任」までが取り上げられ、広くその責任を検討する。そして原発事故に関する判断規準として経営哲学の意義とその原理、生産原理と社会原理に抵触し、判断規準として、この原理の意義が明らかにされて、その結論を得るのである。

本研究の意義として、はじめに「経営哲学」を哲学全体に位置づけ、価値論・知識論、これに存在論の3つの体系から、経営哲学として議論をすすめている点である。経営哲学の類書は、ほとんど理念研究が中心であり、これに経

営倫理が別に議論されていたのであった。『経営哲学』というタイトルの本は何冊か見られるが、その多くは経営学説を中心にしており、経営哲学が基礎をおいている「哲学」の領域にまで踏み込んで議論していなかった。ここに本研究の経営哲学の領域に対して大きな貢献を行ったと見ることができる。本研究を批判し、これを改訂することにより、いっそう確固たる『経営哲学研究』が構築されることになる。

存在論を哲学として明示することにより、複雑で、多重的重層的な多くの社会現象、経営現象が、経済、社会文化、技術エコ、政治法の重層的システムとして存在しているとみることができる。この存在、それ自体を扱うための基礎を与えた点は、複雑で複合的な事象に取り組むための基礎的手がかりを与えた点として、見落とすべきでない。20世紀初めには「新カント派」に拠れば、このような複合事象は「経験対象」であり、科学的分析にするためには、視点をいっそう限定し「分析対象」として措定しなければならないとされていた。

「新カント派」をさらにいっそうおしすすめた「科学哲学」では、「仮説・理論」がまず、存在し、これに対する検証こそが、本来の「科学研究」であるとされている。このような科学論からは、複合事象の総合的研究の必要性が強く意識されても、研究に着手されない。「科学的方法」の優位ではなく、本来の科学が有している「知的探究」を重視し、その中から、複合事象研究のための理論や方法を模索する必要がある。近代哲学では、存在は、認識・方法の隙間から覗き込まれているのである。現代では、システミックリスク、あるいは「構造災」などという用語が用いられ、複雑で複合的な事象の総合的研究が求められている。「オムニバス」形式の研究は多くなされているが、「存在論」を基礎にしつつ、総合研究へ着手すべき時機にあるが、本研究はこうした研究への手がかりを与えるという基礎的貢献を行ったと見ることができる。存在論を措定することで、方法優位の強い軛から逃れることができるのである。今後、存在論を基礎にして、総合的研究を進めることが、本研究から明らかになったであろう。

現代の経営学では、おもに「方法論」「認識論」の観点から、実証性が強調される。実証性が強調されると、経営実践の中で、「責任」は主として「対応・応答」の側面に研究がなされる。このことは、リスクマネジメントの観点から

必要であり、無視してはならない。経営学の中では「社会的責任」が広く議論されている。多くの優れた著書も刊行されている。経営学が進展すればするほど、責任の「負荷・負担」の側面は薄弱になり、ついには経営者の責任は、辞任で終了することになっている。社会的公平性の観点から、「負荷・負担」としての責任の側面も併せて研究すべきことを明らかにした点は、経営学の社会的公平性のバランスにも貢献することになる。「利益の私有化、損失の公有化」の社会的不公平性のバランス回復は、必要であろう。

経営哲学に隣接する諸概念を識別するだけでなく、経営哲学の基礎的課題を、アリストテレスにまで遡り、経営哲学が生産原理と社会性の原理を共に要請することも明らかにした点は、常識的に見えるが、この原理から、本研究で取り上げた東電福島原発事故の責任や今後の在り方に対して、確固とした原理を与えることができたことは、経済界では、原発稼働の要求や輸出などがなされつつある時に、その判断規準を与えることになるだろう。

分業の基層まで掘り下げ、事業経営の基礎が、相互信頼にあることを明らかにした。これは、当然の条件と言われるが、「相互信頼」の存在こそが、分業の社会的進展が繰り広げられる基礎的条件であることを論証したのである。自己保存欲求・自己利益最大化が人間の行動動機と広く理解されてきたが、「大震災時」の時に、日本では社会的安定が見られた。それは、人々の日ごろの教育や経験、慣習、所得や教育などまで含めての社会的格差の少なさが、まさに「自生的秩序」を形成していたので、他国には見られないような社会的な安定がもたらされたことを明らかにし、これと経営哲学の社会性の原理とを結合させ、「経営哲学」の基礎領域、基礎的課題を議論するためのベースを与えたことは、これまでの経営哲学研究の中には見られなかった点である。この点も経営哲学としての貢献として見ることができる。

経営学の責任論については、現代経営学で一般に使われている「ステークホルダー」概念の淵源まで遡り、これが、アメリカの司法過程と緊密に結びついている概念であることを明らかにしたのである。経営学の中で、「ステークホルダー」という用語は使われていても、その淵源が述べられ、この用語のもつ経営学における意義が意識されていなかったが、本研究では、責任の基本的研究のため、その淵源まで明らかにした点は、経営学に対する貢献と見ることが

できる。

経営哲学から福島原発に対する責任を扱った論文は、まだ少ない。今後、急速に研究が進むであろうが、原発に対して「経営哲学」の観点から、いかに考えるのかというその1つの手がかりを初期に準備した点は、今後さまざまな形で、原発事故が経営学で展開されるであろうが、その嚆矢としての意義があると考えられる。

本研究は、これらのいくつかの意義、貢献があると考えられる。ここに本研究の経営学および経営哲学に対する寄与を認めることができるであろう。

問題点としては、「責任」それ自体について、本研究が「経営哲学」の本格的な研究を目指しているなら、「哲学」そして長い間研究の蓄積のある「法哲学」や「刑法」などの領域にまで踏み込み、もう一度、「責任」の領域全体に対する精査が必要であったと思われる点をあげることができるだろう。

もう1つの点は、本研究でケースとして取り上げている「東京電力福島第一原子力発電所の事故」の今後の見通しを、より一層明確にすることが求められることをあげることができるであろう。この点は、2013年以降、今後長い時間がかかるであろうが、日本の司法過程の中で、徐々に解明されて行くであろう。司法過程のなかで、法律用語を借りつつも「経営哲学」の生産原理が、果たしてどの程度言及されるのかということが興味深い。これについては、今後、10年以上必要であろう。また、最近になってやっと「水俣病」の訴訟の決着がついたが、発病以降、半世紀以上確かに経過しているのであった。今後、経営哲学の生産原理と社会性の原理が、その用語を変えても、ここで示した主旨が、どの程度活用されるのかということが、本研究の「実践的意義」になるだろうが、現在のところ未定であるので、今後、見守ることだといえるであろう。

目 次

本書の主旨と概要	vii
1 本書の主旨	vii
2 本書の概要	xvi
第1章 経営哲学の諸部門と基礎的課題	1
1 はじめに	1
2 哲学の諸部門	1
2-1 哲学の諸部門の全体像	1
2-2 経営哲学の観点からの哲学における「存在論」の意義と役割	4
3 哲学に隣接する諸概念	
——思想・理念（信念）・価値観・世界観——	14
3-1 思想	14
3-2 理念（信念）	18
3-3 価値・価値観	20
3-4 世界観	25
4 経営哲学の基礎的課題	25
4-1 実践と善	26
4-2 正義＝正しさ	28
5 経営哲学における文明の意義とその概念	31
5-1 経営哲学における文明の意義	31
5-2 文明の概念の基礎的検討	34
6 経営学における生産の基本的要件と経営哲学の生産原理	
——生命の尊厳・尊重の原理——	45

7	企業の存在する場としての「経済制度」とその多様性	51
8	経営活動と事業の継続性—経営哲学の社会原理 ——合法性と公平性の原理——	56
9	結び—経営哲学の2つの原理 ——生産の基本的要件を充足した生産原理（生命の尊厳・尊重）と 社会的原理（合法性と公平性）——	60
第2章 経営哲学における分業の基層		64
1	はじめに	64
2	「分業の基礎」——現代企業の経営哲学の基礎を求めて——	65
2-1	分業の経済学的意義	65
2-2	分業と生産性	68
2-3	製造業と農業、そして商業と「分業」の状態、社会的分業に ついて	71
2-4	社会編成原理としての「分業」成立の諸条件と多様性の重要性	76
2-5	人間の行動動機としての「自己利益」の一般化とその検討	79
2-6	自己保存欲求と自己利益の最大化	81
2-7	「大震災」時における企業行動	92
2-8	自己生命の維持・保存の危機と社会的安定	97
2-9	社会編成原理としての分業と自生的秩序	98
2-10	「分業」の進展がもたらす諸問題	109
3	結び——分業の基層と経営哲学——	114
第3章 経営学における責任の行方——経営哲学的観点の意義——		119
1	はじめに	119
2	経営学における責任論について	123
2-1	社会的責任論における責任について	123
2-2	経営学の行為論における責任について	134
2-3	随伴的結果における責任について	148
3	結び	161

第4章 社会的責任論の現状とステークホルダー概念の 淵源について	168
1 はじめに	168
2 社会的責任論の現状	169
2-1 ISO（国際標準化機構）26000 の社会的責任（SR）の概要	169
2-2 ISO26000 社会的責任（SR）の具体的内容	174
2-3 社会的責任の原則	177
2-4 組織全体への社会的責任の統合	181
2-5 社会的責任に関する信頼性の向上	184
3 「企業の社会的責任」の歴史的経過と21世紀——パラダイム・ シフト——	185
3-1 地域社会への社会貢献・寄附活動	185
3-2 「社会的制度としての企業観」と「企業の社会的責任」	186
3-3 「社会的責任」の定着化へ ——「企業と社会」、訴訟の当事者適格とステークホルダー—— ...	188
3-4 「社会的責任論」と司法過程・訴訟	193
3-5 21世紀におけるパラダイム・シフト ——エンロン・雪印ショックとSRI投資・企業観の大転換——...	199
4 「ステークホルダー」概念の淵源と経営学	205
4-1 「ステークホルダー」概念の淵源と経営学	205
4-2 「インタレスト・グループ」概念の淵源と経営学	215
5 結び	219
第5章 経営哲学からの東電福島原発の事故責任	225
1 はじめに	225
2 現在までの福島原発事故に関する調査報告書の比較とその課題	227
3 経営哲学からの福島原発事故責任の検討と課題	239
3-1 文明の観点からの福島原発事故の責任	240
3-2 経済制度の観点からの福島原発の事故責任	264

4 経営学および経営哲学からの福島原発事故の責任	278
4-1 「責任」の基礎的概念	278
4-2 「責任」の考え方の変化	285
4-3 経営学の「経営責任」「管理責任」「監督責任」「執行責任」 「事業責任」「説明責任」	286
4-4 東京電力福島第一原発事故の経営学的観点からの責任	292
5 判断規準としての経営哲学の意義とその原理 ——結びにかえて——	326
参考文献	342

参考文献

【邦文文献】

あ行

- 阿部康宏『原発の安全性と核廃棄物の処理』東京図書出版，2013年。
- 安藤泰子『個人責任と国家責任』成文堂，2012年。
- 飯田隆・伊藤邦武・井上達夫他編『科学／技術の哲学』（岩波講座哲学 09 巻）岩波書店，2007年。
- 飯田隆・伊藤邦武・井上達夫他編『モラル／行為の哲学』（岩波講座哲学 06 巻）岩波書店，2008年。
- 池田清彦『生物多様性を考える』中公選書，2012年。
- 磯村健太郎・山口栄二『原発と裁判官』朝日新聞出版，2013年。
- 井筒俊彦『イスラーム文化』岩波文庫，1980年。
- 伊東俊太郎『文明における科学』勁草書房，1976年。
- 伊東俊太郎『近代科学の源流』中央公論社（自然選書），1978年。
- 伊東俊太郎『科学と現実』中央公論社（中公叢書），1981年。
- 伊東俊太郎『12世紀ルネサンス』岩波書店，1993年。
- 伊藤利・田中愛児他著『政治過程論』有斐閣，2000年。
- 井上茂『自然法の機能』勁草書房，1961年。
- 井上達夫編著『公共性の法哲学』ナカニシヤ出版，2006年。
- 井上達彦「ビジネスシステムの新しい視点」『早稲田商学』第415号，2008年3月。
- 井上達彦「競争戦略論におけるビジネスシステム概念の系譜」『早稲田商学』第423号，2010年3月。
- 井上達彦『情報技術と事業システムの進化』白桃書房，1998年。
- 伊原賢・末廣能史『天然ガスシフトの時代』日刊工業新聞社，2012年。
- 岩本晃一『洋上風力発電』日刊工業新聞社，2012年。
- 岩本由輝編著『歴史としての東日本大震災』刀水書房，2013年。
- 植田清次編著『論理実証主義』分析哲学研究論集（1），早稲田大学出版部，1954年。
- 植田清次編著『言語・意味・価値』分析哲学研究論集（2），早稲田大学出版部，1956年。
- 植田清次編著『分析哲学の諸問題』分析哲学研究論集（3），早稲田大学出版部，1957年。
- 植田清次編著『科学哲学への道』分析哲学研究論集（4），早稲田大学出版部，1958年。
- 植田清次編著『現代哲学の基礎』分析哲学研究論集（5），早稲田大学出版部，1960年。
- 内田満『アメリカ圧力団体の研究』三一書房，1980年。
- 内田満『現代アメリカ圧力団体』山嶺書房，1988年。
- 海渡雄一『原発訴訟』岩波新書，2011年。
- 大内一寛・樋尾起年『最高責任論』東信堂，2012年。

- 大河内一男『スミスとリスト』日本評論社，1943年。
- 大島堅一『原発のコスト』岩波新書，2011年。
- 大月博司「組織変革と組織ルーティンのダイナミック性」『早稲田商学』第423号，2010年3月。
- 大月博司『組織変革とパラドックス』同文館出版，1999年。
- 大月博司・藤田誠・奥村哲史『組織のイメージと理論』創成社，2001年。
- 大前研一『原発再稼働最後の条件「福島第一」事故検証プロジェクト最終報告書』小学館，2012年。
- 大森荘蔵・伊東俊太郎編『科学と哲学の界面』朝日出版社，1981年。
- 大森秀臣『共和主義の法理論—公私分離から審議的デモクラシーへ—』勁草書房，1997年。
- 小笠原英司「事業経営の公共性」明治大学経営学研究書『経営論集』第57巻第1・2号，2010年3月，pp. 14-36。
- 小笠原英司『経営哲学研究序説』文眞堂，2004年。
- 尾関周二・武田一博編著『環境哲学のラディカリズム』学文社。
- 恩蔵直人編著『エネルギー問題のマーケティング的解決』朝日新聞出版，2013年。

か行

- 甲斐克則編著『企業活動と刑事規制』日本評論社，2008年。
- 開沼博『「フクシマ」論 原子カムラはなぜ生まれたのか』青土社，2011年。
- 柏木英彦『中世の春—12世紀ルネサンス』創文社，1976年。
- 加藤新平『法哲学概論』有斐閣，1976年。
- 門田隆将『死の淵をみた男：吉田昌郎と福島第一原発の500日』PHP研究書，2012年。
- 上内洋一『原発とメディア』朝日新聞出版，2012年。
- 亀本洋『法哲学』成文堂，2011年。
- 川嶋四郎『差止救済過程の近未来展望』日本評論社，2006年。
- 川端博『責任の理論』成文堂，2012年。
- 川邊信雄「コンビニFCシステムにおける本部対加盟店の軋轢と調整」『早稲田商学』第423号，2010年3月。
- 川邊信雄『タイトヨタの経営史』有斐閣，2011年。
- 川邊信雄『東日本大震災とコンビニ』早稲田大学ブックレット〈「震災後」に考える〉シリーズ第3巻，早稲田大学出版，2011年。
- 菅直人『東電福島原発事故 総理大臣として考えたこと』幻冬舎新書，2012年。
- 菊池敏夫『現代企業論—責任と統治—』中央経済社，2007年。
- 菊池敏夫・平田光弘・厚東偉介編著『企業の責任・統治・再生』文眞堂，2008年。
- 北田曉大『責任と正義』勁草書房，2003年。
- 橘川武郎『日本電力業発展のダイナミズム』名古屋大学出版会，2004年。
- 橘川武郎『電力改革』講談社現代新書，2012年。
- 木村俊道『文明の作法』ミネルヴァ書房，2010年。
- 京都大学経営哲学寄附講座編『経営哲学を展開する』文眞堂，2009年。
- クマール，マントジック／青木薫訳『量子革命』新潮社，2013年。
- 経営哲学学会編『経営哲学とは何か』文眞堂，2003年。

- 経営哲学学会編『経営哲学の实践』文眞堂，2008 年。
- 経営哲学学会編『経営哲学の授業』PHP 研究所，2012 年。
- 小出裕章『この国は原発事故から何を学んだのか』幻冬舎，2012 年。
- 小坂井敏晶『責任という虚構』東京大学出版会，2008 年。
- 小坂井敏晶『人が人を裁くということ』岩波新書，2011 年。
- 小林公著『法哲学』木鐸社，2009 年。
- 小林俊治『経営環境論の研究』成文堂，1990 年。
- 小林俊治・百田嘉治編『社会から信頼される企業』中央経済社，2004 年。
- 小林秀之『新版・アメリカ民事訴訟法』弘文堂，2004 年。
- 小林正弥『サンデルの政治哲学』平凡社新書，2010 年。
- 小堀桂一郎『日本人の「自由」の歴史』文藝春秋，2010 年。
- コリン・P. A. ジョーンズ『アメリカが劣化した本当の理由』新潮社，2012 年。

さ行

- 齊藤誠『原発危機の経済学』日本評論社，2011 年。
- 佐伯啓思『経済学の犯罪』講談社現代新書，2012 年。
- 酒井正三郎『巨視的社会理論の構築』同文館，1981 年。
- 坂野友昭『インターネット上で共有された情報のテキスト分析』『早稲田商学』第 423 号，2010 年 3 月。
- 阪本昌成『法の支配』勁草書房，1990 年。
- 櫻井克彦『現代企業の社会的責任』千倉書房，1979 年。
- 櫻井克彦『現代の企業と社会』千倉書房，1991 年。
- 櫻井克彦「社会環境の転換期における経営学研究の展望と課題」日本経営学会編『21 世紀経営学の課題と展望』経営学論集 72 集，千倉書房，2002 年。
- 佐和隆光編著『サステイナビリティ学』ダイヤモンド社，2008 年。
- 佐和隆光『グリーン資本主義』岩波新書，2009 年。
- 塩野谷祐一『経済哲学原理』東京大学出版会，2009 年。
- 柴健次・太田三郎・本間基照『リスク管理とディスクロージャー』同文館出版，2013 年。
- 新藤宗幸『司法よ！おまえにも罪がある 原発訴訟と官僚裁判官』講談社，2012 年。
- 鈴木信雄『アダム・スミスの知識＝社会哲学』名古屋大学出版会，1992 年。
- 鈴木宣弘『食の戦争』文芸新書・文藝春秋社，2013 年。
- 鈴木英壽『現代ドイツ経営学の方法』森山書店，1993 年。

た行

- 高巖『ビジネスエシックス [企業倫理]』日本経済新聞社，2013 年。
- 高島善哉『経済社会学の根本問題』日本評論社，1941 年。
- 高橋昌一郎『感性の限界』講談社現代新書，2012 年。
- 瀧川裕英『責任の意味と制度』勁草書房，2003 年。
- 竹内啓『社会科学における数と量』東京大学出版会（UP 選書），1971 年。
- 竹内啓『近代合理主義の光と影』新曜社，1979 年。

- 竹内啓二『電力の社会史』朝日新聞出版, 2012 年。
- 竹本洋『『国富論』を読む』名古屋大学出版局, 2005 年。
- 館野淳『シビリアクシデントの脅威』東洋書店, 2012 年。
- 田中成明『法的空間—強制と合意の狭間で—』東京大学出版会, 1993 年。
- 谷口勇仁『企業事故発生のメカニズム』白桃書房, 2012 年。
- 谷本寛治『企業権力の社会的制御』千倉書房, 1987 年。
- 谷本寛治『CSR—企業と社会を考える—』NTT 出版, 2006 年。
- 千代田郁夫「アーサー・アンダーセンの崩壊は何を教えているのか?」『早稲田商学』第 434 号, 2013 年 1 月。
- 辻哲夫『世界の中の科学精神⑤ 科学と社会』工作舎, 1980 年。
- 辻中豊『利益集団』東京大学出版会, 1988 年。
- 恒藤恭『法の基本問題』岩波書店, 1936 年。
- 恒藤恭『法の本質』岩波書店, 1968 年。
- 恒藤恭『法の本質』岩波書店, 1996 年。
- 鶴見和子・市井三郎編著『思想の冒険』筑摩書房, 1974 年。
- 東京電力原子力発電所事故調査委員会『国会事故調 報告書』徳間書店, 2012 年。
- 東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会『政府事故調 中間・最終報告書』メディア
アランド, 2012 年。
- 堂目卓生『アダム・スミス』中公新書, 2008 年。
- 鳥羽欣一郎『企業発展の史的研究』ダイヤモンド社, 1970 年。
- 朝永振一郎・江沢洋編『プロメテウスの火』みすず書房, 2012 年。
- 張一兵著／中野英夫訳『マルクスへ帰れ』情況出版, 2013 年。

な行

- 長尾龍一・田中成明編『現代法哲学 1 法理論』東京大学出版会, 1983 年。
- 長尾龍一・田中成明編『現代法哲学 3 実定法の基礎理論』東京大学出版会, 1983 年。
- 中谷哲郎・川端久夫・原田實編著『経営理念と企業責任』ミネルヴァ書房, 1979 年。
- 中谷実『アメリカにおける司法積極主義と消極主義』法律文化社, 1987 年。
- 中辻豊『利益集団』東京大学出版会, 1988 年。
- 中野剛充『テイラーのコミュニタリアニズム』勁草書房, 2004 年。
- 中村一彦『企業の社会的責任』改訂増補版, 同文館, 1980 年。
- 中村雄二郎『日本における制度と思想』未来社, 1967 年。
- 中山茂『歴史としての学問』中央公論社 (中公叢書), 1974 年。
- 新倉俊一『ヨーロッパ中世人の世界』筑摩書房, 1983 年。
- 日本科学技術ジャーナリスト会議『4 つの「原発事故調」を比較・検証する』水曜社, 2013 年。
- 日本弁護士連合会『原発事故・損害賠償マニュアル』日本加除出版, 2011 年。
- 沼上幹『行為の経営学』白桃書房, 2000 年。
- 野中郁次郎『知識創造企業』東洋経済新報社, 1996 年。
- 野村秀世『プラトンの正義論』東海大学出版会, 2008 年。

は行

- 長谷部恭男『比較不能な価値の迷路』東京大学出版会，2000年。
- 林良嗣・田渕六郎・岩松将一・森杉雅史編著『持続性学：自然と文明の未来バランス』名古屋大学環境学叢書，明石書店，2010年。
- 樋口範雄『アメリカ憲法』弘文堂，2011年。
- 平田光弘『経営者自己統治論』中央経済社，2008年。
- 廣松渉『世界の共同主観的存在構造』勁草書房，1972年。
- 廣松渉『事的世界観への前哨』勁草書房，1975年。
- 廣松渉『もの・こと・ことば』勁草書房，1979年。
- ホップス著／水田洋訳『リヴァイアサン』岩波文庫，全4冊，岩波書店，1954，1964，1985，1992年。
- 深井滋子『持続可能な世界論』ナカニシヤ出版，2005年。
- 福岡伸一『世界は分けても分らない』講談社現代新書，2000年。
- 福岡伸一『生物と無生物の間』講談社現代新書，2007年。
- 福岡伸一『動的平衡』木楽舎，2009年。
- 福島原発事故独立検証委員会『福島原発事故独立検証委員会 調査・検証報告書』（民間事故調），デイスカヴァー・トゥエンティワン，2012年。
- 福島民報社編集局『福島と原発：誘致から大震災への五十年』早稲田大学出版部，2013年。
- 藤田誠「社会性と経営戦略」『早稲田商学』第423号，2010年3月。
- 藤田誠『企業評価の組織論的研究』中央経済社，2007年。
- 藤本隆宏『生産システムの進化論』有斐閣，1997年。
- 藤本隆宏『能力構築競争』中公新書，2003年。
- 藤本隆宏『ものづくり経営学』光文社新書，2007年。
- 藤本隆弘・キム・クラーク『増補版製品開発力』ダイヤモンド社，2009年。
- 藤本隆弘・桑嶋健一『日本型プロセス産業』有斐閣，2000年。
- 藤本隆宏・安本雅則『成功する製品開発』有斐閣，2000年。
- 布施祐仁『ルポ イチエフ 福島第一原発レベル7の現場』岩波書店，2012年。
- 二神恭一『西ドイツ企業論』東洋経済新報社，1971年。
- 二神恭一『労務管理論』同文館，1976年。
- 二神恭一『参加の思想と企業制度』日本経済新聞社，1976年。
- 二神恭一『使用者なき経営』経済日本新聞社（日経新書），1978年。
- 二神恭一『産業クラスターの経営学』中央経済社，2008年。
- 二神恭一編著『戦略的人材開発論』中央経済社，1988年。
- 二神恭一編著『企業経営論』第2版，八千代出版，1998年。
- 二神恭一編著『企業と人材 人的資源管理』八千代出版，2000年。
- 淵上正朗・笠原直人・畑村洋太郎『福島原発で何が起きたか 政府事故調技術解説』日刊工業新聞社，2012年。
- 船橋洋一『カウントダウン・メルトダウン』（上・下）文藝春秋社，2012年。
- ホセヨンパルト・金澤文雄『法と道徳—リーガル・エシックス入門』（新版）成文堂，1983年。

堀米庸三編『西欧精神の探究—革新の12世紀』日本放送協会出版, 1976年。

本間慎・畑明郎編著『福島原発事故の放射能汚染』世界思想社, 2012年。

ま行

毎日新聞夕刊編集部『〈3・11〉忘却に抗して』現代書館, 2012年。

松野弘『環境思想とは何か』ちくま新書, 2009年。

松宮輝『風力発電 挑戦から未来へ』東洋書店, 2012年。

松本耿郎「アッラーへ至る道における二人の女性」『早稲田商学』第427号, 2011年3月。

松本三和夫『構造災』岩波新書, 2012年。

馬淵澄夫『原発と政治のリアリズム』新潮新書, 2013年。

水田洋『アダム・スミス論集』ミネルヴァ書房, 2009年。

三戸公『随伴的結果』文眞堂, 1994年。

村上淳一『システムと自己観察』東京大学出版会, 2000年。

村上博巳『証明責任の研究』新版, 有斐閣, 1986年。

村上陽一郎『西欧近代科学』新曜社, 1974年。

村上陽一郎『近代科学と聖俗革命』新曜社, 1975年。

村上陽一郎『科学のダイナミックス』サイエンス社, 1980年。

村上陽一郎『科学史の逆遠近法』中央公論社（自然選書）, 1982年。

村田晴夫『管理の哲学』文眞堂, 1984年。

モリソン・フォスター外国法事務弁護士事務所／伊藤迪子翻訳監修『第2版・アメリカの民事訴訟法』
有斐閣, 2006年。

森田邦久『量子力学の哲学—非実在性・非局所性・粒子と波の二重性—』講談社現代新書, 2011年。

森本三男『企業社会的責任の経営学的研究』白桃書房, 1994年。

や行

矢島祐利『アラビア科学史序説』岩波書店, 1977年。

矢島祐利『アラビア科学の話』岩波新書, 1980年。

柳澤寿男『戦場のタクト』実業之日本社, 2012年。

矢内義顯「13世紀の一修道士がみた十字軍とイスラーム」『早稲田商学』第427号, 2011年3月。

八巻和彦『クザーヌスの世界像』創文社, 2001年。

八巻和彦「〈文明の衝突〉を超える視点」『早稲田商学』第427号, 2011年3月。

山口誠一『クリエートする哲学—新行為論入門—』弘文堂, 2000年。

山田健太・野口武悟編『3.11の記録—東日本大震災資料総覧』震災篇・原発事故篇, 日外アソシエー
ツ, 2013年8月。

山田純大『命のビザを繋いだ男：小辻節三とユダヤ難民』NHK出版, 2013年。

山本信『哲学の基礎』北樹出版, 1988年。

山本浩美『アメリカ環境訴訟法』弘文堂, 2002年。

由井常彦『清廉の経営』日本経済新聞社, 1993年。

わ

若杉二列『原発ホワイトアウト』講談社，2013年9月。

渡辺幹雄『ロールズ 正義論の行方』増補版，春秋社，2000年。

和田一夫『ものづくりの寓話』名古屋大学出版会，2009年。

【欧文文献】

A

Acemoglu, Daron and Robinson, James A. (2012), *Why Nations Fall: The Orgins of Power, Prosperity, an Poverty*, Crown Business. (鬼澤忍訳『国家はなぜ衰退するのか (上・下)』早川書房，2013年。)

Adorno, Theodor, Albert, Hans, Dahrendorf, Ralf, Habermas, Jürgen, Pilot, Harald, Popper & Karl (1969), *Der Positivismusstreit in er deutschen Soziologie*, Luchterhand Verlag. (城塚登・浜井修訳『社会科学の論理』河出書房新社，1979年。)

Amable, Bruno (2003), *The Diversity of Mo ern Capitalism*, Oxford univ. Press. (山田敏夫・原田裕治他訳『五つの資本主義』藤原書店，2005年。)

Amonn, Alfred (1927), *Objekt und Grundbegriffe der theoretischen National-ökonomie* zweite, erweiterte Auflage, Leipzig und Wien. (山口忠夫訳『理論経済学の対象と基礎概念』有斐閣，初版1937年，再版1950年。)

Arendt, Hannah, edited by Kohn, Jerome (2003), *Responsibility an Judgment*, Schocken Books. (中山元訳『責任と判断』筑摩書房，2007年。)

Ayer, A. J. (1940), *The Foun ations of Empirical Knowle ge*, The Macmillan Press. (神野他訳『経験的知識の基礎』勁草書房，1991年。)

Ayer, A. J. (1946), *Language, Truth an Logic, Revise E ition*, London: Victor Gollanz, Ltd.

B

Bachelard, Gaston (1927), *Essai sur la Connaissance Approchée*, Paris: J. Vrin. (豊田彰・及川馥・片山洋之介訳『近似的認識試論：ガストン・バシュラール』国文社，1982年。)

Bachelard, Gaston (1938), *La Formation e l'esprit Scientifique, Contribution á une Psychanalyse e la Connaissance Objactive*, Paris: J. Vrin. (及川馥・小井戸光彦訳『科学的精神の形成：客観的認識の精神分析のために＝ガストン・バシュラール』国文社，1975年。)

Barracough, Geoffrey (1955), *History in a Changing Worl*, Oxford: Basil Blackwell. (前川貞次郎・兼岩正夫訳『転換期の歴史』社会思想社，1964年。)

Bateson, Gregory (1972), *Steps to an Ecology Min*, Harper & Row Publishers, Inc. (佐藤良明訳『精神の生態学』思索社，1990年。)

Bateson, Gregory (1979), *Min an Nature: A Necessary Unity*, N. Y.: E. P. Dutton. (佐藤良明訳『精神と自然：生きた世界の認識論』思索社，1982年。)

- Bazerman, Max H. and Waktkins, Michael (2004), *Predictable Surprises: The Disasters You Should Have Seen Coming, and How to Prevent them*, Harvard Business School Publishing Corp. (奥村哲史訳『予測できた危機をなぜ防げなかったのか? 組織・リーダーが克服すべき3つの障壁』東洋経済新報社, 2011年。)
- Bentley, A. F., (1908), *The Process of Government: a Study of Social Pressures*, The University of Chicago press. (喜多靖郎・上林良一訳『統治過程論』法律文化社, 1994年。)
- Berger, P. L. and Luckmann, T. (1966), *The Social Constructions of Reality*, New York: Anchor Books. (山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社, 1977年。)
- Berker, Ernest (1934), *Natural Law and the Theory of Society 1500 to 1800*, Cambridge U. P. (田中浩・津田晨吾・新井明訳『近代自然法をめぐる二つの概念』お茶の水書房, 1988年。)
- Berle & Means (1932), *The Modern Corporation and Private Property*, The Macmillan Company. (北島忠男訳『近代株式会社と私有財産』文雅堂, 1958年。)
- Bhaskar, Roy (1975), *A Realist Theory of Science*, Leeds Books. (式部信訳『科学と実在』法政大学出版局, 2009年。)
- Blatt, Richard L., Hammesfahr, Robert W., Nugent, Lori S. and Alberts, David W. (1988), *Punitive Damages*, West Publishing Co. (大隈一武訳『懲罰的賠償額』保険毎日新聞社, 1995年。)
- Blumberg, P. I. (1972), *Corporate Responsibility in a Changing Society*, Boston Univ. School of Law.
- Borkenau, Frantz (1934), *Der Übergang von Feudalen zum Bürgerlichen Weltbild*, Paris: Félix Alcan. (水田洋・花田圭介・矢崎光圀他訳『封建的世界像から市民的世界像へ』みすず書房, 1965年。)
- Bowler, Peter J. (1984), *Evolution, The History of an Idea*, The Regents of the University of California. (鈴木善次他訳『進化思想の歴史』(上・下) 朝日新聞社, 1987年。)
- Braudel, Fernand (1979), *Civilisation Matérielle, Économie et Capitalisme XV^e-XVIII^e Siècle*, Paris: Librairie Armand Colin. (村上光彦訳『日常性の構造』(I・II), 山本淳一訳『交換のはたらき』(I・II), 村上光彦訳『世界時間』(I・II) みすず書房, 1984-1990年。)
- Bridgeman, Percy Williams (1927), *The Logic of Modern Physics*, New York: Macmillan.
- Buckley, W. (1967), *Sociology and Modern Systems Theory*, Prentice Hall. (新睦人・中野秀一郎訳『一般社会システム論』誠信書房, 1977年。)
- Burnham, J. (1941), *The Managerial Revolution*, Indiana Univ. Press. (武山泰雄訳『経営者革命』日本経済新聞社, 1965年。)
- Burt, Edwin Arthur (1932), *Metaphysical Foundations of Modern physical Science, 2nd, revised edition*, Doubleday Anchor. (市場泰男訳『近代科学の形而上学的基础』平凡社, 1988年。)
- Butterfield, H. (1957), *The Origins of Modern Science 1300-1800*, G. BELL AND SONS LTD. (渡辺正雄訳『近代科学の誕生』上・下, 講談社学術文庫, 1978年。)

C

- CAILLÉ, Alain (1989), *Critique de la Raison Utilitarie*, LA DÉCOUVERT. (藤岡俊博訳『功利的理性批判』以文社, 2011年。)
- Campbell, Andrew and Tawadey, Kiran (1990), *Missions and Business Philosophy*, Butterworth-

- Heinemann Ltd.
- Canguilhem, Georges (1977), *La Formation du Concept et le Reflexe au XVII^e et XVIII^e siècles*, 2^eme édition, J. Vrin. (金森修訳『反射概念の形成』法政大学出版局, 1988年。)
- Carnap, Rudolf (1966), *Philosophical Foundations of Physics*, New York: Basic BOOK Inc.
- Carson, Rachel (1962), *Silent Spring*, Penguin Books. (青樹築一訳『沈黙の春』新潮文庫, 1974年。)
- CED (Committee for Economic Development), *Social Responsibility of business Corporation*, CED.(経済同友会訳『企業の社会的責任』鹿島出版会, 1972年)
- Chanseller, Edward (1999), *Devil Take the Hindmost*, N. Y.: Farrar, Straus, Giroux. (山岡洋一訳『パブルの歴史』日経 BP 社, 2000年。)
- Cole, Arthur H. (1959), *Business Enterprise in its Social Setting*, Harvard Univ. Press. (中川敬一郎訳『経営と社会』ダイヤモンド社, 1965年。)
- Crane, Andrew and Matten, Dirk, eds. (2007), *Corporate Social Responsibility, Volume 1, 2, 3*, SAGE Publications.

D

- Davis, K. (1975), *Business and Society: Environment and Responsibility* (3rd ed.), MacGraw-Hill.
- d'Espagnat, Bernard (1981), *A la Recherche du Réel, Le regard d'un physicien*, Bordas. (柳瀬睦男監訳／丹治信治訳『現代物理学にとって実在とは何か』培風館, 1988年。)
- de Bary, Wm. Theodore (1983), *The Liberal Tradition in China*, The Chinese University of Hong Kong. (山口久和訳『朱子学と自由の伝統』平凡社選書, 1987年。)
- Dekker, Sidney (2008), *JUST Culture*, Ashgate Publishing Ltd. (芳賀繁監訳『ヒューマンエラーは裁けるか』東京大学出版会, 2009年。)
- Dawson, Christopher (1934), *Medieval Religion*, London: Sheed and Ward. (野口啓祐訳『中世キリスト教と文化』新泉社, 1969年。)
- Drucker, P. F. (1939), *The End of Economic Man*, The John Day Company. (岩根忠訳『経済人の終わり』(ドラッカーの序文あり) 東洋経済新報社, 1963年。上田惇生訳『「経済人」の終わり』ダイヤモンド社, 1997年。)
- Drucker, P. F. (1942), *The Future of Industrial Man*, The John Day Company. (岩根忠訳『産業にたずさわる人々の未来』東洋経済新報社, 1963年。田代義範訳『産業人の未来』未来社, 1965年。)
- Drucker, P. F. (1949), *The New Society*, Harper & Brothers Publishers. (現代経営研究会訳『新しい社会と新しい経営』ダイヤモンド社, 1957年。)
- Drucker, P. F. (1954), *The Practice of Management*, Harper & Row. (現代経営研究会訳『現代の経営』自由国民社, 1956年, ダイヤモンド社, 1965年。)
- Dupuy, Jean-Pierre (1982), *Ordres et Désordres: Enquête sur un nouveau paradigme*, Paris: Editions du seuil. (古田幸男訳『秩序と無秩序』法政大学出版局, 1987年。)
- Durkheim, Émile (1893), *De la Division du Travail Social*, Paris: P. U. F. (田原音和訳『社会分業論』青木書店, 1971年。)

E

- Eagleton, Terry (2000), *The Idea of Culture*, Blackwell. (大橋洋一訳『文化とは何か』松柏社, 2006年。)
- Easton, David (1965), *A Framework for Political Analysis*, Prentice-Hall. (岡村忠夫訳『政治分析の基礎』みすず書房, 1968年。)
- Eells, R. (1960), *The Meaning of Modern Business*, Columbia U. P. (企業制度研究会訳『ビジネスの未来像』雄松堂, 1974年。)
- Ehrlich, Eugen (1913), *Grundlegung der Soziologie des Rechts*, Dunker & Humboldt. (河上倫逸・M. フーブリヒト訳『法社会学の基礎理論』, みすず書房, 1984年。)
- Emmet, Dorothy and MacIntyre, Alisdair ed. (1970), *Sociological Theory and Philosophical Analysis*, London: Macmillan. (松井清・久保田芳廣訳『社会学理論と哲学的分析』弘文堂, 1976年。)
- Evans-Pritchard, E. E. (1940), *The Nuer*, Oxford: the Clarendon Press. (向井元子訳『ヌアー族』岩波書店, 1978年。)

F

- Fagan, Brian (2011), *ELIXIR: A History of Water and Humankind*, Walker Publishing Co. (東郷えりか訳『水と人類の1万年史』河出書房新社, 2012年。)
- Fagan, Brian (2008), *The Great Warming*, New York: Bloomsbury Press. (東郷えりか訳『千年前の人類を襲った大温暖化』河出書房新社, 2008年。)
- Fagan, Brian (2004), *The Long Summer*, New York: Basic Books. (東郷えりか訳『古代文明と気候大変動』河出書房新社, 2006年。)
- Feyerabend, P. K. (1974), *Against Method*, London: New Left Books. (村上陽一郎・渡辺博訳『方法への挑戦』新曜社, 1981年。)
- Fichte, J. G. (1845), *Fichtes Works*, Walter de Gruyter & Co. (宮崎洋三訳『學者の使命・學者の本質』岩波文庫, 1942年。隈元忠敬・阿部典子他訳「教育論・大学論・学者論」R. ラウト・加藤尚武・隈元忠敬・坂部恵・藤沢賢一郎編『フィヒテ全集』第22巻, 哲書房, 1988年。)
- Foucault, Michel (1966), *Les Mots et Les Choses*, Paris: Éditions Gallimard. (渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物—人文科学の考古学—』新潮社, 1974年。)
- Foucault, Michel (1969), *L'archéologie du Savoir*, Paris: Éditions Gallimard. (中村雄二郎訳『知の考古学』改訳新版, 河出書房新社, 1981年。)
- Fraassen, Bas C. van (1980), *The Scientific Image*, Oxford Univ. Press. (丹治信治訳『科学的世界像』紀伊國屋書店, 1986年。)
- Friedman, Benjamin M. (2005), *The Moral Consequences of Economic Growth*, Alfred A. Knopf. (地主敏樹・重富公生・佐々木豊訳『経済成長とモラル』東洋経済新報社, 2011年。)
- Freidman, Milton (1962), *Capitalism and Free Man*, Univ. of Chicago Press. (熊谷尚夫他訳『資本主義と自由』マグローヒル好学社, 1975年。)

G

- Gadamer, Hans-Georg (1976), *Vernunft im Zeitalter der Wissenschaft*, Suhrkamp Verlag. (本間謙二・座小田豊訳『科学の時代における理性』法政大学出版局, 1988 年。)
- Gadamer, Hans-Georg (1975), *Wahrheit und Methode*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen. (轡田収・麻生建他訳『真理と方法Ⅰ』法政大学出版局, 1986 年。轡田収・巻田悦郎訳『真理と方法Ⅱ』法政大学出版局, 2008 年。轡田収他訳『真理と方法Ⅲ』法政大学出版局。)
- Galbraith, J. K., (1969), *The Great Crash 1929*, Houghton Mifflin. (村井章子訳『大暴落 1929』日経 BP クラシックス, 2008 年。小原敬士訳『大恐慌』徳間書店, 1971 年。)
- Gay, Peter (1969), *The Enlightenment: An Interpretation Volume II: The Science of Freedom*, N.Y.: Alfred A. Knopf. (中川久定・鷺見洋一・中川洋子・永見文雄・玉井通和訳『自由の科学』(上・下) ミネルヴァ書房, 1982 年。)
- Geertz, Clifford (1983), *Local Knowledge*, Basic Books, Inc. (梶原景昭・小泉潤二他訳『ローカル・ノレッジ』岩波書店, 1991 年。)
- Giddens, Anthony (1988), *The Third Way*, Polity Press. (佐和隆光訳『第三の道』日本経済新聞社, 1999 年。)
- Giddens, Anthony (1976), *New Rules of Sociological Method*, London: Century Hutchinson Ltd. (松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳『社会学の新しい方法規準』而立書房, 1987 年。)
- Gordon, R. A. (1945), *Business Leadership in the Large Corporation*, Washington: Brookings Institution. (平井泰太郎・森昭夫訳『ビジネス・リーダーシップ』東洋経済新報社, 1954 年。)
- Gray, John (1989), *Liberalism: Essays in Political Philosophy*, Routledge. (山本貴之訳『自由主義論』ミネルヴァ書房, 2001 年。)
- Gray, John (2000), *Two Faces of Liberalism*, Polity Press. (松野弘監訳『自由主義の二つの顔』ミネルヴァ書房, 2006 年。)

H

- Habermas, Jürgen (1963), *Strukturwandel der Öffentlichkeit*, Neuwied (Luchterhand). (細谷貞雄訳『公共性の構造転換』未来社, 1973 年。)
- Habermas, Jürgen (1963), *Theorie und Praxis*, Herman Luchterhand, Verlag GmbH. (細谷貞雄訳『理論と実践 社会哲学論集』未来社, 1975 年。)
- Habermas, Jürgen (1992), *Faktizität und Geltung*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (河上倫逸・耳野健二訳『事実性と妥当性』(上・下) 未来社, 2002・2003 年。)
- Habermas, Jürgen (1968), *Technik und Wissenschaft als Ideologie*, Suhrkamp Verlag. (長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』紀伊国屋書店, 1970 年。)
- Habermas, Jürgen (1968), *Erkenntnis und Interesse*, Suhrkamp Verlag. (奥山治良・八木橋實・渡辺祐邦訳『認識と関心』未来社, 1981 年。)
- Haft, Fritjof (1990), *Aus der Waagschale der Justitia*, MÜNCHEN: Verlag C. H. Beck. (平田公夫訳『正義の女神の秤から』木鐸社, 2004 年。)
- Hall, Edward T. (1966), *The Hidden Dimension*, New York: Doubleday & Company Inc. (日高敏隆・

- 佐藤信行訳『かくれた次元』みすず書房, 1970 年。)
- Hanson, Norwood R. (1969), *Perception and Discovery*, Freeman, Cooper & Company. (野家啓一・渡辺博訳『知覚と発見 (上・下)』紀伊國屋書店, 1982 年。)
- Hart, H. L. and HONORÉ, Tony (1985), *Causation in law*, Oxford University Press. (井上裕司・真鍋毅・植田博訳『法における因果性』九州大学出版, 1991 年。)
- Hartnack, Justus (1986), *Human Rights*, Mouton. (飛田就一・小林茂・木戸正幸訳『人権・正義・国家』富士書店, 1990 年。)
- Hassemer, Winfried (2009), *Warum Strafe sein Muss*, Berlin: Ullstein Buchverlage GmbH. (堀内捷三監訳『刑罰はなぜ必要か 最終弁論』中央大学出版部, 2012 年。)
- Hayek, F. A (1973), *Law, Legislation and Liberty*, The University of Chicago Press. (西山千明・矢島鈞次監修/矢島鈞次・水吉俊彦訳『ハイエク全集 (第 8～10 巻) 法と立法と自由 (I・II・III)』春秋社, 1985-1988 年。)
- Hayek, F. A. (1960), *The Constitution of Liberty*, The University of Chicago Press. (気賀健三・古賀勝次郎訳『自由の条件 (I・II・III)』春秋社, 1985-1989 年。)
- Hayek, F. A. (1952), *The Sensory Order*, The University of Chicago Press. (穂山貞登訳『感覚秩序』春秋社, 1990 年。)
- Hayek, F. A. (1952), *The Counter-Revolution of Science*, The Free Press. (佐藤茂行訳『科学による反革命—理性の濫用—』木鐸社, 1979 年。)
- Hayek, F. A. (1964), *Individualism and Economic Order*, Routledge & Kegan Paul Ltd. (田中真晴・田中秀夫編訳『市場・知識・自由』ミネルヴァ書房, 1986 年。)
- Haskins, C. H. (1957), *The Renaissance of the Twelfth Century*, Cleveland: Meridian Books 49. (野口洋二訳『12 世紀ルネサンス』創文社, 1975 年。)
- Haskins, C. H. (1957), *The Renaissance of the Twelfth Century*, Cleveland: Meridian Books 49. (別宮貞徳・朝倉文市訳『12 世紀ルネサンス』みすず書房, 1989 年。)
- Heidegger, Martin (1927, 9th ed. 1961), *Sein und Zeit*, Frankfurt am Main: V. Klostermann. (細谷貞雄訳『存在と時間』理想社, 1963 年 (なお, 本書は筑摩書房から学芸文庫として再刊されている)。)
- Heilbroner, R. L. (1972), *In the Name of Profit*, N. Y.: Doubleday & Co. Inc. (太田哲夫訳『利潤追求の名の下に』日本経済新聞社, 1973 年。)
- Heisenberg, Werner (1958), *Physics and Philosophy*, New York: Harper & Row. (河野伊三郎・富山小太郎訳『現代物理学の思想』みすず書房, 1959 年。)
- Hempel, Carl G. (1966), *Philosophy of Natural Science*, Prentice-Hall Inc.
- Homans, George C. (1967), *The Nature of Social Science*, Harcourt Brace Jovanovich. (橋本茂訳『社会科学の性質』誠信書房, 1981 年。)
- Hont, Istvan and Ignatieff, Michael (eds.) (1983), *Wealth and Virtue*, Cambridge. (水田洋・杉山忠平監訳『富と徳: スコットランド啓蒙における経済学の形成』未来社, 1990 年。)
- Hunke, Sigrid (1960), *Allahs Sonne Über dem Abendland*, Stuttgart: Deutsche Verlags-Austalt. (高尾利数訳『アラビア文化の遺産』みすず書房, 1981 年。)

I

ISO (2010), *ISO26000 Guidance on Social Responsibility*, ISO. (ISO/SR 国内委員会監訳『ISO26000: 2010 社会的責任に関する手引き』日本規格協会, 2011 年。)

J

Jacoby, N. H. (1973), *Corporate Power and Social Responsibility*, Macmillan. (経団連事務局訳『自由企業と社会』産能短大出版局, 1975 年。)

Jacobs, Jane (1992), *Systems of Survival: Dialogue on the Moral Foundations of Commerce and Politics*, Random House, Inc. (香西泰訳『市場の倫理・統治の倫理』日本経済新聞社, 2003 年。)

Jantsch, Erich (1980), *The Self-Organizing Universe*, N. Y. Braziller. (芹沢高志・内田美恵訳『自己組織化する宇宙』工作舎, 1986 年。)

Jonas, Hans (1979), *Das Prinzip Verantwortung*, Frankfurt am Main: Insel Verlag. (加藤尚武監訳『責任という原理』東信堂, 2000 年。)

K

Kane, Mary K. (2000), *Civil Procedure in a Nutshell, 4th ed.*, West Group. (石田裕敏訳『アメリカ民事訴訟手続』木鐸社, 2003 年。)

Kaufmann, Arthur (1976), *Das Schulprinzip*, Carl Winter Universitätsverlag. (甲斐克則訳『責任原理』九州大学出版会, 2001 年。)

Kaufmann, Arthur (1997), *Rechtsphilosophy: 2nd Edition*, Munchen: C. H. Beck OHG. (上田健二訳『法哲学』ミネルヴァ書房, 2006 年。)

Kindleberger, Charles P. (2000, 2002), *Manias, Panics and Crashes: A History of Financial Crises, 4th ed.*, John Wiley & Sons Inc., Palgrave Macmillan. (吉野俊彦・八木甫訳『熱狂・恐慌・崩壊: 金融恐慌の歴史』日本経済新聞社, 2004 年。)

Koestler, Arthur and Smytheis, J. R. (eds.) (1969), *Beyond Reductionism*, The Hutchinson Publishing Group Ltd. (池田善昭監訳『還元主義を越えて』工作舎, 1984 年。)

Koestler, Arthur (1972), *The Roots of Coincidence*, Hutchinson Publishing Group. (村上陽一郎訳『偶然の本質』蒼樹書房, 1974 年。)

Koontz, Harold ed. (1964), *Towards a Unified Theory of Management*, McGraw-Hill. (鈴木英壽訳『経営の統一理論』ダイヤモンド社, 1968 年。)

Koyré, Alexandre (1939), *Études galiléennes*, Heramann. (菅谷暁訳『ガリレオ研究』法政大学出版局, 1988 年。)

Knight, Frank H. (2004), *The Ethics of Competition*, The University of Chicago Press. (高哲男・黒木亮訳『競争の倫理』ミネルヴァ書房, 2009 年。)

Knight, Frank H. (1960), *INTELLIGENCE and Democratic Action*, Cambridge, Massachusetts: Harvard Univ. Press. (黒木亮訳『フランクナイト 社会哲学を語る』ミネルヴァ書房, 2012 年。)

Kuhn, Thomas S. (1962), *The Structure of Scientific Revolutions*, The Univ. of Chicago. (中山茂訳

『科学革命の構造』みすず書房, 1971 年。)

L

Lakatos, Imre and Musgrave, A., eds. (1970), *Criticism and the Growth of Knowledge*, Cambridge University Press. (森博監訳『批判と知識の成長』木鐸社, 1985 年。)

Lakatos, Imre (1978), *The Methodology of Scientific Research Programmes, Vol. 1*, Cambridge University Press. (村上陽一郎・井山弘幸・小林傳司・横山輝雄訳『方法の擁護』新曜社, 1986 年。)

L'Arc, No. 48, 1972. (足立和浩・清水昭俊・菅野盾樹他訳『マルセル・モースの世界』みすず書房, 1974 年。)

Lasswell, H. D. and Kaplan, A. (1950), *Power and Society*, Yale Univ. Press.

Lasswell, H. D. (1948), *Power and Personality*, W. W. Norton. (永井陽之助訳『権力と人間』創元新社, 1954 年。)

Lasswell, H. D. (1951), *Psychopathology and Politics*, The Free Press. (加藤正泰訳『政治と人間』岩波書店, 1955 年。)

Lasswell, H. D. (1936), *Politics*, McGraw-Hill. (久保田きぬ子訳『政治』岩波書店, 1955 年。)

Lasswell, H. D. (永井陽之助訳「行動科学における決定過程の研究」『思想』No. 376, 1955 年 10 月号, pp. 13-26.

Le Goff, Jacques (1957), *Les intellectuels au moyen âge*, Paris: Editions du Seuil. (柏木英彦・三上朝造訳『中世の知識人』岩波書店, 1977 年。)

Levin, Simon A. (1999), *Fragile Dominion*, Preseus Publishing. (重定南奈子・高須夫悟訳『持続不可能性：環境保全のための複雑系理論入門』文一総合出版, 2003 年。)

Lévi-Strauss, Claude (1955), *Tristes Tropiques*, Librairie Plon. (川田順造訳『悲しき熱帯』上・下, 中央公論社, 1977 年。)

Lévi-Strauss, Claude (1958), *Anthropologie Structurale*, Paris. (生松敬三・川田順造他訳『構造人類学』みすず書房, 1972 年。)

Lévi-Strauss, Claude (1962), *La Pensée sauvage*, Paris. (大橋保夫訳『野生の思考』みすず書房, 1976 年。)

Lévi-Strauss, Claude (1962), *Le Totémisme aujourd'hui*, Paris. (仲沢紀雄訳『今日のトーテミズム』みすず書房, 1970 年。)

Lévi-Strauss, Claude (1952), *Race et Histoire*, Unesco. (荒川幾男訳『人種と歴史』みすず書房, 1970 年。)

Lévi-Strauss, Claude (1967), *Les structures Élémentaires de La Parenté*, Mouton & Co. (馬淵東一・田島節夫監訳・花崎皋平・鍵谷明子他訳『親族の基本構造』上・下, 番町書房, 1977・1978 年。)

Lieberman, Jethro K. (1981), *The Litigious Society*, N. Y.: Gorges Borchardt Inc. (長谷川俊明訳『訴訟社会』保険毎日新聞社, 1993 年。)

Lindsay, J. (eds.), *The History of Science*, London: Cohen & West Ltd. (菅井準一訳『近代科学の歩み』岩波新書, 1956 年。)

Lock, John (1698) ed. by P. Laslett, 2nd ed. (1967), *Two Treatises of Government*, Cambridge. (加藤

節訳『統治二論』岩波書店, 2007 年。)

Lock, John (1698) ed. by P. Laslett, 2nd ed. (1967), *Two Treatises of Government*, Cambridge. (伊藤宏之訳『全訳 統治論』柏書房, 1997 年。)

Lowi, Th. J. (1969), *The End of Liberalism*, W. W. Norton & Co. (村松岐夫監訳『自由主義の終焉』木鐸社, 1981 年。)

Luhmann, Niklas (1972), *Rechtssoziologie*, Rowohlt TASCHENBUCH Verlag GmbH. (村上淳一・六本佳平訳『法社会学』岩波書店, 1977 年。)

Luhmann, Niklas (1973), *Vertrauen*, Ferdinand Enke Verlag. (大庭健・正村俊之訳『信頼』勁草書房, 1990 年。)

M

MacIntyre, Alasdair (1981), *After Virtue*, University of Notre Dame Press. (篠崎栄訳『美徳なき時代』みすず書房, 1993 年。)

Mach, Ernst (1905), *Erkenntnis und Irrtum*, Verlag von Johann Ambrosius Barth, Leipzig. (廣松渉・加藤尚武編訳『認識の分析』法政大学出版局, 1971 年。)

Malinowski, Bronislaw (1944), *A Scientific Theory of Culture*, The University of North Carolina Press. (姫岡勉・上子武次訳『文化の科学的理論』岩波書店, 1958 年。)

Malinowski, Bronislaw (1926), *Crime and Custom in Savage Society*, Routledge & Kegan Paul Ltd. (青山道夫訳『未開社会における犯罪と慣習』ぺりかん社, 1967 年。)

Malinowski, Bronislaw (1922), *Argonauts of the Western Pacific*, Routledge & Kegan Paul Ltd. (寺田和夫・増田義郎訳「西太平洋の遠洋航海者」泉靖一・増田義郎編訳『世界の名著 59 マリノフスキー／レヴィ＝ストロース』中央公論社, 1967 年。)

Malinowski, Bronislaw (1945), *The Dynamics of Culture Change*, Mexico: Anna Valetta Malinowaka. (藤井正雄訳『文化変化の動態』理想社, 1963 年。)

Mapel, David (1989), *Social Justice Reconsidered: The Problem of Appropriate Precision in a Theory of Justice*, University of Illinois Press. (塚田公人訳『社会的正義論の再検討』成文堂, 1996 年。)

Martinez Alier, Juan (1991), *Ecological Economics*, Basil Blackwall Ltd. (工藤秀明訳『エコロジー経済学』新評論, 1999 年。)

McIntosh, Robert P. (1985), *The Background of Ecology*, Cambridge U. P. (大串隆之・井上弘・曾田克滋訳『生態学』思索社, 1989 年。)

Meadows, Donella, Randers, Jorgen and Meadows, Dennis (2004), *Limits to Growth: The 30-Year Update*, Earthscan. (枝廣淳子訳『成長の限界 人類の選択』ダイヤモンド社, 2005 年。)

Meadows, Donella, Meadows, Dennis, Randers, Jorgen and Behrens, William (1972), *The Limits to Growth*, Universe Books. (大来佐武郎監訳『成長の限界』ダイヤモンド社, 1972 年。)

Merleau-Ponty, Maurice (1942 rééd. 2002), *La Structure du Comportement*, Paris: PUF. (滝浦静雄・木田元訳『行動の構造』みすず書房, 1964 年。)

Merleau-Ponty, Maurice (1960), *Signes*, Paris: Gallimard. (竹内芳郎監訳『シーニュ 1・2』みすず書房, 1969・1970 年。)

- Merleau-Ponty, Maurice (1945), *Phénoménologie de la Perception*, Paris: Gallimard. (宮本忠雄訳『知覚の現象学 1・2』みすず書房, 1967・1974 年。)
- Merleau-Ponty, Maurice (1948, rééd. 1996), *Sens et non-sens*, Paris: Nagel, Gallimard. (滝浦静雄他訳『意味と無意味』みすず書房, 1988 年。)
- Merleau-Ponty, Maurice (1964), *L'Œil et l'Esprit*, Paris: Gallimard. (滝浦静雄・木田元訳『眼と精神』みすず書房, 1990 年。)
- Merleau-Ponty, Maurice (1964), *Le Visible et l'Invisible*, Paris: Gallimard. (滝浦静雄・木田元訳『見えるものと見えないもの』みすず書房, 1989 年。)
- Merton, Robert K. (1957), *Social Theory and Social Structure*, U. S. A.: Free Press. (森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳『社会理論と社会構造』みすず書房, 1961 年。)
- Miller, David. (2007), *National Responsibility and Global Justice*, Oxford University Press (富沢克・伊藤恭彦・長谷川一年・施光恒・竹島博之訳『国際正義とは何か』風行社, 2011 年。)
- Mills, D. Q. (2003), *Wheel, Deal, and Steal*, D. Q. Mills, Springer. (林大幹訳『アメリカ CEO の犯罪』シュプリンガー・フェアラーク東京, 2004 年。)
- Mitteis, Heinrich (1948), *Über das Naturrecht*, Berlin: Akademie-Verlag. (林毅訳『自然法論』創文社, 1971 年。)
- Montesquieu, Charles-Louis de (1748), *De l'esprit des lois (On The Spirit of the Laws)*, Pléiade. (野田良之・稲本洋之助・上原行雄・田中治男・三邊博之・横田地弘訳『法の精神』上・中・下, 岩波書店, 1987-1988 年, 岩波文庫, 1989 年。)
- Moore, Wilbert (1978), "Functionalism," Bottmore, Tom and Nisbest, Robert (eds.), *A History of Sociological Analysis*, Basic Books, Chap. 9. (石川実訳『機能主義』アカデミア出版会, 1986 年。)
- Morrall, J. B. (1967), *The Medieval Imprint*, C. A. Watts & Co. (城戸毅訳『中世の刻印』岩波書店, 1972 年。)
- Mullhall, Stephen and Swift, Adam (1992), *Liberals and Communitarians*, 2E, Blackwell. (谷澤正嗣・飯島昇藏他訳『リベラル・コミュニタリアン論争』勁草書房, 2007 年。)

N

- Nagel, Ernest (1961), *The Structure of Science*, New York: Harcourt Brace & World.
- Najita, Tetuo (1987), *Visions of Virtue in Tokugawa Japan*, Univ. of Chicago Press. (子安宣邦訳『懷徳堂：18 世紀日本の「徳」の諸相』岩波書店, 1992 年。)
- Needham, Joseph (1981), *Science in Traditional China*, The Chinese University of Hong Kong. (牛山輝代・薮内清訳『中国科学の流れ』思索社, 1984 年。)
- Needham, Joseph (1954-1971), *Science and Civilization in China*, Cambridge U. P. (東畑精一・薮内清監修『中国の科学と文明』第 1 巻『序編』, 第 2 巻・第 3 巻『思想史』上・下 (全 11 巻あり), 思索社, 1975-1980 年。)
- Newman, W. H. (1951), *Administrative Action*, Prentice-Hall, Inc. (高宮晋・作原猛志訳『経営管理』有斐閣, 1963 年。)
- North, Douglass C. (1981), *Structure and Change in Economic History*, W. W. Norton. (中島正人訳『文明史の経済学』春秋社, 1989 年。)

Nozick, Robert (1974), *Anarchy, State, and Utopia*, Basic Books Inc. (嶋津格訳『アナーキー・国家・ユートピア』木鐸社, 1994 年。)

O

Ott, Konrad and Gorke, Martin (2000), *Spektrum der Umweltethik*, Marburg: Metropolis Verlag. (滝口清栄・A. ヴァルナー監訳『越境する環境倫理学：環境先進国ドイツの哲学的フロンティア』現代書館, 2010 年。)

P

Parsons, T. and Shils, E. A. eds., (1954), *Toward a General Theory of Action*, Harvard University Press. (永井道雄・作田啓一・橋本真訳『行為の総合理論をめざして』日本評論社, 1960 年。)

Petit, T. A. (1967), *The Moral Crisis in Management*, McGraw-Hill. (土屋守章訳『企業モラルの危機』ダイヤモンド社, 1969 年。)

Pollard, Sidney (1968), *The Idea of Progress*, London: C. A. Watts & Co., Ltd. (船橋喜恵訳『進歩の思想』紀伊国屋書店, 1971 年。)

Picht, Georg (1966, 1969), *Der Gott der Philosophen und die Wissenschaft der Neuzeit*, Ernst Klett Verlag. (岡本三夫訳『歴史の経験』未来社, 1978 年。)

Polanyi, Karl (2001), *The Great Transformation: The Political and Economic Origins of Our Time, Second Edition*, Beacon Paperback. (野口建彦・来栖学訳『新訳 大転換』東洋経済新報社, 2009 年。)

Polanyi, Karl (1966), *Dahomey and the Slave Trade*, Univ. of Washington Press. (栗本慎一郎・端信行訳『経済と文明』サイマル出版会, 1981 年。)

Polanyi, Michael (1946), *Science, Faith and Society*, Geoffrey Cumberlege Oxford Univ. Press. (中桐大有・吉田謙二訳『科学・信念・社会』晃洋書房, 1989 年。)

Polanyi, Michael, ed. by M. Green (1969), *Knowing and Being*, The Univ. of Chicago Press. (佐野安仁・澤田允夫・吉田謙二訳『知と存在』晃洋書房, 1985 年。)

Polanyi, Michael (1973), *Personal Knowledge*, London: Routledge & Kegan Paul. (長尾史郎訳『個人的知識』ハーベスト社, 1985 年。)

Polanyi, Michael (1966), *The Tacit Dimension*, London: Routledge & Kegan Paul. (佐藤敬三訳『暗黙知の次元』紀伊国屋書店, 1980 年。)

Popper, K. R. (1959), *The Logic of Scientific Discovery*, London: Hutchinson. (大内義一・森博訳『科学的発見の論理』上・下, 恒星社厚生閣, 1971 年, 1972 年。)

Popper, K. R. (1963), *Conjectures and Refutation*, Routledge and Kegan Paul. (藤本隆志・石垣壽郎・森博訳『推測と反駁』法政大学出版局, 1980 年。)

Popper, K. R. (1972), *Objective knowledge*, Oxford: Clarendon Press. (森博訳『客観的知識』木鐸社, 1974 年。)

Post, James E., Lawrence, Anne T. and Weber, James (2002), *Business and Society: Corporate Strategy, Public Policy, Ethics, 10/E*, The McGraw-Hill Companies Inc. (松野弘・小阪隆秀・谷本寛治監訳『企業と社会』上・下, ミネルヴァ書房, 2012 年。)

Prahl, Hans W. (1978), *Sozialgeschichte des Hochschulwesens*, München: Kösel-Verlag-GmbH &

Co. (山本尤訳『大学制度の社会史』法政大学出版局, 1988 年。)

Prigogine, Ilya and Stengers, Isabelle (1984), *Order out of Chaos*, New York: Bantam Books. (伏見康治・伏見謙・松枝秀明訳『混沌からの秩序』みすず書房, 1987 年。)

R

Radcliffe-Brown, A. R. (1952), *Structure and Function in Primitive Society*, London: Cohen and West. (青柳まちこ・蒲生正男訳『未開社会における構造と機能』新泉社, 1975 年。)

Rapoport, Anatol (1953), *Operational Philosophy: Integrating Knowledge and Action*, New York: Harper & Brothers.

Rushdall, H. (1936), *The Universities of Europe in The Middle Ages, 3 Vols.*, A New edition by Powicke, F.M. and Emden, A. B., Oxford University Press. (横尾壮英訳『大学の起源』上・中・下巻, 東洋館出版社, 1966 年。)

Russell, Bertrand. (1960), *Freedom and Organization*, George Allen and Urwin Ltd. (バートランド・ラッセル著作集, 2～3 巻, 大淵・鶴見・田中訳『自由と組織』みすず書房, 1954-1956 年。)

Russell, Bertrand. (1917), *Mysticism and Logic*, George Allen and Urwin Ltd. (バートランド・ラッセル著作集, 4 巻, 江森巳之助訳『神秘主義と論理』みすず書房, 1954-1956 年。)

Russell, Bertrand. (1948), *Human Knowledge*, George Allen and Urwin Ltd. (バートランド・ラッセル著作集, 9～10 巻, 鎮目恭夫訳『人間の知識』みすず書房, 1954-1956 年。)

Russell, Bertrand. (1946), *A History of Western Philosophy*, George Allen and Urwin Ltd. (バートランド・ラッセル著作集, 11～14 巻, 市井三郎訳『西洋哲学史』みすず書房, 1954-1956 年。)

Rawls, John (1999), *A Theory of Justice, Revised Edition*, Harvard University Press. (川本隆史・福岡聡・神島裕子訳『正義論』改訂版, 紀伊國屋書店, 2010 年。)

Reichenbach, Hans (1951), *The Rise of Scientific Philosophy*, The Regents of the Univ. of California.

Rossi, Paolo (1957), *Francesco Bacone*, Bari: Editori Laterza. (前田達郎訳『魔術から科学へ』サイマル出版会, 1970 年。)

Runciman, W. G. (1983), *A Treatise on Social Theory, Vol. 1, The Methodology of Social Theory*, Cambridge. (川上源太郎訳『社会理論の方法』木鐸社, 1991 年。)

S

Said, Edward W. (1978), *Orientalism*, Aitken, Stone & Wylie Ltd. (板垣雄三・杉田英明監修・今沢紀子訳『オリエンタリズム』上・下, 平凡社, 1993 年。)

Said, Edward W. (1994), *Representations of the Intellectual*, Reith Lectures, Vintage. (大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社 (平凡社ライブラリ), 1998 年。)

Sandel, Michael (2005), *Public Philosophy*, Harvard University Press. (鬼澤忍『公共哲学』筑摩書房, 2011 年。)

Sandel, Michael (1998), *Liberalism and the Limits of Justice, Second Edition*, Cambridge U. P. (菊池理夫訳『リベラリズムと正義の限界』勁草書房, 2009 年。)

Schulink, Bernhard (2002), *Vergangenheitsschul und Gegenwärtiges Recht*, Suhrkamp Verlag. (岩淵達治・藤倉孚子・中村昌子・岩井智子訳『過去の責任と現在の法—ドイツの場合』岩波書店,

2005 年。)

- Searle, John R. (2001), *Rationality in Action*, Massachusetts Institute of Technology. (塩野直之訳『行為と合理性』勁草書房, 2008 年。)
- Sennett, Richard (1976), *The Fall of Public Man*, Alfred A. Knopf. (北山克彦・高階悟訳『公共性の喪失』晶文社, 1991 年。)
- Sheldon, Oliver (1924), *The Philosophy of Management*, Sir Issac Pitman and Sons Ltd. (企業制度研究会訳『経営のフィロソフィ』雄松堂, 1974 年。田代義範訳『経営管理の哲学』未来社, 1974 年。)
- Smelser, Neil J. (1963), *Theory of Collective Behavior*, The Free Press. (会田彰・木原泰訳『集合行動の理論』誠信書房, 1973 年。)
- Smith, Adam (1776), *Wealth of Nations*, L. L. D. and F. R. S. of London and Edinburg. (A. スミスの『国富論』の日本語版については, 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫, 第 1 分冊, 昭和 34 年 (1959 年)~第 5 分冊, 昭和 41 年 (1966 年): 大河内一男監訳『国富論』中公文庫, 第 1 分冊 (1978 年)~第 3 分冊 (1978 年): 水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』岩波文庫, 第 1 分冊 (2000 年)~第 4 分冊 (2001 年) などを上げることができる。なお, 「国富論」刊行 200 年を記念して, 日本で雄松堂から, 初版の「復刻版」が刊行されている。英語版については次のものを参照。Skinner, Andrew, ed. (1970, 1999), *The Wealth of Nations*, Penguin Classics, I-V. なお, スミスの道徳哲学については次のものを参照。Smith, A. (1759, 1790, 1808), *The Theory of Moral Sentiments*, 1st E., *The Theory*, 6th e., *Bell and Bra fute*, Penguin Classics. (水田洋訳『道徳感情論』上・下, 岩波文庫, 2003 年。米林富雄訳『道徳情操論』上・下, 未来社, 1969-1970 年。)
- Söderbaum, Peter (2008), *Un erstan ing Sustainability Economics*, Earthscan LTD. (大森正之・小祝慶紀・野田浩二訳『持続可能性の経済学を学ぶ』人間の科学社, 2010 年。)
- Southern, R. W. (1953), *The Making of the Mi le Ages*, Harvard U. P. (森岡敬一郎・池上忠弘訳『中世の形成』みすず書房, 1978 年。)
- Southern, R. W. (1962), *Western Views of Islam in the Mi le Ages*, Harvard U. P. (鈴木利章訳『ヨーロッパとイスラム世界』岩波書店, 1980 年。)
- Sorel, Georges (1908), *Les illusions u Progrès*, Marcel Rivère. (川上源太郎訳『進歩の幻想』清水幾太郎編集現代思想 2, ダイヤモンド社, 1974 年。)
- Spaemann, Robert (2011), *Nsch uns ie Kernschmelze: Hybris im atomaren Zeitalter*, Stuttgart: Klett-Cotta-J. G. Cotta's Buchhandlung Nachfolger GmbH. (山脇直司・辻麻衣子訳『原子力時代の驕り』知泉書館, 2012 年。)
- Squires, Susan E., Smith, Cynthia, McDougall, Lorna, Yeack and William, R. (2003), *Insi e Arthur An ersen: Shifting values, Unexpecte consequences*, Pearson Educatoion, Inc. (平野皓正訳『名門アーサーアンダーセン消滅の軌跡』シュプリンガー・フェアラーク, 2003 年。)

T

- Teubner, Gunther, Hrsg. (1995), *Entshei— ungsfolgen Als Rechtsgrün e: Folgeno—rientiertes argumentieren in Rechts—vergleichen er Sicht*, Barden-Barden: Nomos VERL.—GES. (村上淳一・小川浩三訳『結果志向の法思考: 利益衡量と法律家的論証』東京大学出版会, 2011 年。)

Thomas, Keith (1983), *Man and the Natural World: Changing Attitudes in England 1500-1800*, Penguin Books. (山内和監訳『人間と自然界：近代イギリスにおける自然観の変遷』法政大学出版局, 1989年。)

Truman, David B. (1951), *The Governmental Process: Political Interests and Public Opinion*, Alfred A. Knopf.

V

Verger, Jacques (1973), *Les Universités au Moyen Âge*, Paris: P. U. F. (大高順雄訳『中世の大学』みすず書房, 1979年。)

Virilio, Paul (2005), *l'accident originel*, Éditions Galilée. (小林正巳訳『アクシデント 事故と文明』青土社, 2006年。)

W

Wallerstein, Immanuel (2006), *European universalism*, The New Press. (山下範久訳『ヨーロッパの普遍主義』明石書店, 2008年。)

Walzer, Michael (1983), *Spheres of Justice*, New York: Basic Books. (山口晃訳『正義の領分—多元性と平等の擁護』而立書房, 1997年。)

Warnke, Georgia (1992), *Justice and Interpretation*, Backwell Publishers. (有賀誠『正義と解釈』昭和堂, 2002年。)

Watt, W. Montgomery (1972), *The Influence of Islam on Medieval Europe*, Edinburgh U. P. (三木亘訳『地中海世界のイスラーム—ヨーロッパとの出会い』筑摩書房, 1984年。)

Watts, Duncan J. (2011), *Everything is Obvious: Once You Know the Answer*, William Morris Endeavor Entertainment LLC. (青木創訳『偶然の科学』早川書房, 2012年。)

Whitehead, Alfred North (1925), *Science and the Modern World*, Cambridge U. P. (上田泰治・村上至孝共訳『科学と近代世界』創元社, 1954年。)

Winch, Peter (1958), *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*, Routledge & Kegan Paul. (森川真規雄訳『社会科学の理念』新曜社, 1977年。)

Winner, Langdon (1986), *The Whale and the Reactor: A Search for Limits in an Age of High Technology*, The University of Chicago Press. (吉岡斉・若松征男訳『鯨と原子炉』紀伊国屋書店, 2000年。)

Wisser, Richard (1993), *Verantwortlich Meuschein* (Hrsg.), Emil Kettering, v. Hase & Koehler Verlag, Maluz. (平野明彦・中山剛史他訳『責任—人間存在の証』理想社, 2012年。)

Wooton, Graham (1970), *Interest-Group*, Prentice-Hall Inc.

Wren, Daniel A. (1994), *The Evolution of Management Thought, 4th edition*, John Wiley & Sons, Inc. (佐々木恒男監訳『マネジメント思想の進化』文眞堂, 2003年。)

Wright, Georg Henrik von (1971), *Explanation and Understanding*, Cornell University Press. (丸山高司・木岡伸夫訳『説明と理解』産業図書, 1984年。)

Y

Yin, Robert K. (1994), *Case Study Research, 2/e*, Sage Publications, Inc. (近藤公彦訳『ケース・スタディの方法』第2版, 千倉書房, 1996年。)

